まとめ

しあさん

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
いろんな話のまとめ
ろくでもないことしかない

目次

慈悲寮異類婚姻譚 ―― 1
賢者の島坑道戦 ―― 160

慈悲寮異類婚姻譚

1　歌劇『海神別荘』　広報担当3―C　ウキタ

当スレッドはオクタヴィネル寮主催・公演、歌劇『海神別荘』の公式スレッドＮｏ．５です。過去スレッドはログに格納されておりますので別途検索してください。

主に感想・考察などご自由にどうぞ。

端末ＩＰ・所属寮・部屋番・クラス・名前は記録されています。演者、スタッフへの凸・荒らし・叩きを行った生徒はしかるべき措置として弊寮が誇る海のギャングを貴寮・御部屋に放流いたしますのでそのつもりで。

◇歌劇『海神別荘』専用ページ◇

ｈｔｔｐ：／／～～～

2　歌劇『海神別荘』　広報担当3―C　ウキタ

■　海神別荘とは

監督生の故郷に伝わる、キョウカ・イズミ作の戯曲。異類と人間の精神・肉体的格差、華やかなセリフ運びによる耽美で神秘的な世界観は人々に広く親しまれている。

■　あらすじ

碧玉殿（へきぎょくでん）の海の公子（こうし）のもとへ、陸の美女が公子に仕える黒潮の騎士や近侍を伴って輿入れのために向かっていました。その様子を公子は僧都（そうず）や博士と語り合いながら眺めます。

宮殿に到着した美女は海底の美しさに惚れ惚れとしながらも地上への未練を訴え続けるため、公子は不機嫌となり人間ではなくなったことを告げますが、美女はさらに深く悲しんで受け入れません。

公子は次第に怒り、美女を斬ろうと剣を向け……。

公演時間：1時間45分

■　キャスト（主要キャストのみ）

海の公子：アズール・アーシェングロット

陸の美女：ユウ・アンドー

近侍：ジェイド・リーチ

僧都：フロイド・リーチ

博士：ハヤセ・ウツセミ

その他キャストの情報はこちら

ｈｔｔｐ：／／～～～

３　歌劇『海神別荘』　広報担当３―Ｃ　ウキタ

■　チケット、公演ＤＶＤ、公演グッズの販売・ご予約はこちら

ｈｔｔｐ：／／～～～

オクタヴィネル寮内モストロ・ラウンジでは現在「海神別荘」の舞台である碧玉殿をイメージした内装およびメニューを展開しております。

詳しくはホームページまたはマジカメをご覧ください。

◇モストロ・ラウンジ公式ＨＰ◇

ｈｔｔｐ：／／～～～

◇モストロ・ラウンジ公式ＭＧ◇

ｈｔｔｐ：／／～～～

■　協賛

ハーツラビュル寮

イグニハイド寮

ポムフィオーレ寮
一部教員
詳細はこちら
ｈｔｔｐ：／／～～～

4　匹目のクラゲ
ウキタくんおっつおっつ
一部教員（1―A担任）

5　匹目のクラゲ
ウキタくんて修学旅行のとき毒寮長を絶望的な私服センスで気絶させた伝説を持つ極東出身の人魚やよね
広報お疲れ～

6　匹目のクラゲ
乙～
＞＞5　気絶寸前の毒寮長が息も絶え絶えに言い放った「髪は綺麗」はＮＲＣ史に残

る名言

それはそうと監督生さんの思いつきはカラスに匹敵する鋭さがあるフツーあのオクタヴィネルを使って芝居やろうとは思わんて

７　匹目のクラゲ

公演スケジュール

ｈｔｔｐ：／／～～～

平日公演

１７：００　開場

１７：３０～１９：１５

１９：４５～２１：３０

休日公演

１０：３０　開場

１１：００～１２：４５

１４：００～１５：４５

１６：１５～１８：００

公演期間は金曜から翌金曜

ＤＶＤ収録日は不明
応援上映は翌金曜の１７：３０公演
千秋楽はカーテンコール後にキャストからのコメントがある

８　匹目のクラゲ
＞＞７　有能

９　匹目のクラゲ
＞＞７　慈悲寮ＩＤ流石

１０　匹目のクラゲ
役名が個人名じゃなくてまさに〝役の名前〟だからわかりやすいと思うじゃろ？
あれは一回見ただけじゃ内容理解できない
慈悲寮の罠にかかってまんまと二回目見に行ったワイは今モストロのイベントメニューのドリンク全制覇した

１１　匹目のクラゲ

＞＞１０　草

１２　匹目のクラゲ
初日勢だけど＞＞１０の言うとおり全く理解できなかった
分かりにくいんじゃなくて世界観が超常じみててわからない

１３　匹目のクラゲ
妖精的世界観だよな～
アズールの役が倫理観ぶっ飛んでてヤバいしかわからなかった

１４　匹目のクラゲ
＞＞１３　それだ、妖精的な感覚

１５　匹目のクラゲ
俺最初監督生の役名が陸の美女って書かれてるの見たとき「うせやろｗｗｗｗｗ美女ｗｗｗｗ自意識過剰乙ｗｗｗｗｗｗ」ってワロててて
制作発表映像見たらマジで綺麗で腰抜かした

１６　匹目のクラゲ
だいたいそうなる
協賛からわかるように演者や舞台のビジュアルは我が寮長お墨付きなので…

１７　匹目のクラゲ
歌とかも慈悲寮長に失笑されてたレベルだったって聞いたしマジで化けたよな監督生……

１８　匹目のクラゲ
１―Ａの猪突猛進自爆特攻上等の気風作ってるのってアイツでしょ
やべえな

１９　匹目のクラゲ
いや草なんだわ

２０　匹目のクラゲ

世界観わからない理由ってあれじゃん、そんな監督生の故郷っていうか馴染みのない極東文化に近いからじゃね？

２１　匹目のクラゲ

それはあるかも

見たことない服装だったし、あんなに裾が長くて足にまとわりつくようなドレスで素早く動き回れるのってスゲー

アズールが着てた衣装もなんか重そうだし

２２　匹目のクラゲ

タイトな服が好きなたこちゃんらしくない服だったよねえ

２３　匹目のクラゲ

【速報】モストロ・ラウンジで上映会開催

２４　匹目のクラゲ

＞＞２３　マ????

２５　匹目のクラゲ
＞＞２３　いこっかな

２６　匹目のクラゲ
思いのほかマジカメがバズっちゃったから寮内ホールのキャパ足りなくなったんだろうな～いこ

２７　匹目のクラゲ
今のモスラの内装異国情緒漂ってて素晴らしいぞ
そんな雰囲気の中でうまい飯と飲み物飲めるって最高じゃね

２８　匹目のクラゲ
＞＞２７　回しものかって思ったけど厳格ＩＤで草生えた

２９　匹目のクラゲ
今回の上映会は実況ＯＫだし、陰キャ寮長の手引きでイベントメニューの宅配注文す

ると特別生放送会場のＵＲＬもらえるから引きこもりオタクどもも見れるぞ！
なお録画やクラックを実行しようとすると逆探知されウツボの〝顧客リスト〟に載るから、絞められたいやつはやればいいと思うぞ
３０　匹目のクラゲ
実況解説ＯＫなのに録画クラックはＮＧとは

３１　匹目のクラゲ
ここ学内掲示板だしな
チケット代もワンドリンク＋フード程度の値段だからあの守銭奴にしては良心的だと思うわ…

３２　匹目のクラゲ
なおＤＶＤやグッズ、イベントメニューはそれなりにする

３３　匹目のクラゲ
あとは>>１０みたいに一回見ただけじゃよくわからないのと
演劇全く関心なかったワイでも何度も見たくなるレベルでリピれる完成度だから

３４　匹目のクラゲ
初見
監督生に見に来いってチケットもらって寮長たちと見に来たんだが
寮長が寝てる……起こした方がいいのか？

３５　匹目のクラゲ
＞＞３４　お、らっしゃい
実況始まるからゆっくりしてけよな
そのライオンな……起きるときは起きるからほっといていいぞ……

３６　匹目のクラゲ
ところで名前なんでクラゲなんすかね

３７　匹目のクラゲ
＞＞３６　わからん

３８　匹目のクラゲ
>>３３　見に行った時点で関心なかったわけじゃないやろ

３９　匹目の３３
>>３８　制作発表のときたまたまラウンジにいて見てたんだよ……
監督生がタイプド直球すぎた……

４０　匹目のクラゲ
正直
モスラ「制作発表今日あるよー」
ワイ「ほな見たろ」
毒寮長によってＳＳＲ歌うまド美人に化けた監督生「よ　ろ　し　く」
死「ワイ」
って流れはある
ないって思ったそこのＮＲＣ生
ある（ブロマイドコンプリートセット専用フォルダ付き５８００マドル三冊所持）

４１　匹目のクラゲ
＞＞４０　勝った　俺監督生の直筆サイン色紙持ってる

４２　匹目の４０
クソが代

４３　匹目のクラゲ
何の戦い?????

４４　匹目のクラゲ
監督生は１―Ａを率いるうえに問題に巻き込まれたと思えば被害を拡大させつつ解決するとかいう台風の目だし、イソギンチャク事件前の中間テストで首席に乗り上げかける程度には頭がいいし、本人の容姿も特に可愛くもないからモテないんだよな
問題に巻き込まれがちなのはお人よしな性格だからともいえるけど

４５　匹目のクラゲ
監督生だって＞＞４４にモテてもしゃあないやろ

女は男より優秀だったらいけないとか
性格に難があるからダメとか
それで見た目がどうとか言うのはちょっと引くワ……

４６　匹目のクラゲ
いくら治安最悪で有名なＮＲＣでも４４の発言はない
ウツボさん出番です

４７　本目のキノコ
＞＞４４さんことスカラビア寮１―Ｅサファル・ゲリックさん
先日の中間テストの折に一学年主席の座からとうとう転落なさったとお噂をうかがっております
つきましては本日の公演が終わり次第そちらに伺わせていただきますね
副寮長さんからお部屋で待機しているよう指示が出ていると思いますので、
大人しくなさっててください

４８　匹目のウツボ

逃げんなら逃げてもいーよ
そっちのほうが絞め甲斐がありそうだし

４９　匹目のクラゲ
あらら
＞＞１を熟慮しないから

５０　匹目の元イソギンチャク
逃げるなよサファルお前が逃げたら危険なウツボが二匹も寮内に放流されるんやぞ
なんなら逃げてくれてもいいって言ってるぞこいつら
きのこはそう言ってなくても俺にはわかる

５１　匹目のクラゲ
流しましょう

５２　匹目のクラゲ
上映会楽しみすぎるな

気になってもホール行く勇気ないし、見に行けなかったからＤＶＤ待つかって思ったけどわざわざ生放送までやってくれるとは……
財布の紐が緩む緩む……

５３　匹目のクラゲ
気になったジャンルはだいたい沼説立証しちゃうのはオタクの性だからな

５４　匹目のクラゲ
演出はお宅の寮長さんだっけ？
肝入りだって聞いたけどマジで??
見てきた人どうだった???

５５　匹目のクラゲ
＞＞５４　マジですごいぞ
生放送でも致し方なしだとは思うけどあれは見に行くべき
具体的にどうとは言わない

５６　匹目のクラゲ
＞＞５５　はぇ～…
ネタバレ配慮ニキもっと自分を誇って

５７　匹目のクラゲ
あああああラウンジ満席だあああああああああ無理いいいいいいいいいいやあああああああああああああ

５８　匹目のクラゲ
なんか叫んでら

５９　匹目のクラゲ
嘆願書送る……たこちゃんおねがい上映会セカンドシーズンおねがい……談話室上映会じゃ味わえない臨場感をください……

６０　匹目のクラゲ
ポムＩＤ…まああの雰囲気の中でのんびり観劇できたら人生の質あがりそうだしな

６１　匹目のクラゲ
そういえば海神別荘の原作ではジェリチの役は男じゃなくて女で
ジェリチが雰囲気にあってるからあえて男の役にしたって監督生から話を聞いた

６２　匹目のクラゲ
原作クラッシャーになってないのがこの人気ぶりからわかる

６３　匹目のクラゲ
＞＞６１　そんなこと言ってたんか

６４　匹目のクラゲ
他の女の役は普通に性転換薬やってんのにな

６５　匹目のクラゲ
実況開始間に合ったか？
イグニミニキッチンカプメン勢で大混雑してたｗ

いつもあんなに人見ないからどっから湧いて出たのかわからんｗ

６６　匹目のクラゲ

もうすぐ始まるぞ～

＞＞６５　協賛寮だと今日の上映会は特別に談話室で中継の許可が出たんだよね

人がぎゅうぎゅうでトレクロパイセンがクッキーやビスケットを振舞ってくれたぞ

！

ちなみにハーツトップスリーとマブたちは初日の海神別荘見に行ったらしい

なんでかみんな詳しい感想は言わんけど

なに

怖いんだが

６７　個目のケーキ

今のうちにティッシュを用意しといたほうがいいぞ

うちの一年二人が泣きじゃくって大変だったな

６８　匹目のクラゲ

そんな恐ろしいんかこのミュージカル
妖精には刺さりそうだけど……

６９　匹目のクラゲ
で、誰が爆速タイピング披露するん？

７０　オルト@実況
僕だよ！
兄さんは舞台の演出で忙しいからって監督生さんからのお願いがあったんだ

７１　匹目のクラゲ
おーオルトくんか
なら安心

７２　匹目のクラゲ
演出家って役者をコマ扱いして踏ん反りかえってるイメージあったんだけどあの寮長がそんなことしな…しな……

７３　匹目のクラゲ
あの人一度のめり込むと徹底して凝らすから…ソースはハロウィーンの鎧

７４　匹目のクラゲ
熱入ると独善的になるからなぁあの寮長さん…
オルトくん頑張ってな！
お兄さんも頑張ってるだろうし　たぶん　おそらく

７５　匹目のクラゲ
あの人部屋から遠隔操作で制御盤プログラム弄ってるでしょ

７６　匹目の陰キャ
おおむね７５氏の言うとおりですがなにか

７７　匹目のクラゲ
なんかでた

７８　匹目のクラゲ
＞＞７６　あっ！　対面会話ＮＧって自称してたくせに監督生と演出プランで長々と語ってた寮長だ！
そのくせ監督生とそれ以外の会話になったらなったで秒で黙る陰キャの鑑の寮長じゃないですか！

７９　匹目のクラゲ
＞＞７６　今日も輝いてますね！　主に頭が！

８０　匹目のクラゲ
＞＞７６　よっ、彼女いない歴＝年齢の万年非リア童貞！

８１　匹目の陰キャ
＞＞７８―８０　死んでくれｗ
言うて拙者オルトの実況と公演を楽しみつつプログラム弄ってるからぽまいらより充実してるでござるよ～ｗ

８２　匹目の蝶々
マウンティングの調子も上々だなイデア

８３　匹目のクラゲ
今更なんやが博士役のハヤセって誰

８４　匹目のクラゲ
＞＞８３　怪異スレ常連のセミさん

８５　匹目のクラゲ
＞＞８４　マ？？？？？？？　と思ったらマジだった

８６　匹目のクラゲ
いるだけで空気を和やかにし、怒れば相手をノータイムでおとなしくさせ……
そんな彼の生態である壁すり抜けゴーストもどきがユニ魔じゃなくて体質とは誰が言ったか……

８７　匹目のクラゲ
ままその話は怪異スレでやるとして

８８　匹目のクラゲ
開演アナウンスまである
凝ってるな～
これ話してるのアズール？

８９　匹目のクラゲ
＞＞８８　せやで

９０　匹目のクラゲ
最初の場面から飛ばしてくるぞ！
気を付けろ！

９１　オルト@実況

エメラルドやサファイアで造られた極東風の美しい宮殿の中で歌い踊る女官たち。
ここは深海の御殿「碧玉殿」で、煌びやかで何時も花が香るような場所だと謳う。
しかし今日はとくべつめでたい日だと浮かれている。なぜならば、この宮殿の主が婚姻を結ぶからだ。
「ねえ、熱帯魚ちゃんたち」
上手――客席から見て右手の方に設置された翡翠の堅牢な反り橋を、その長身ほどもあろうかという錨を逆さにしたような杖を肩に担いでやってきたフロイドは、色鮮やかな錦の着物でめかし込んだ女官たちを絶妙な呼び名で喩えた。
濃紺に紫と白の着流しを大胆に着崩し青海波の帯を締め、黒いインナーやアームカバー、長い足をよりよく見せるタイトなパンツなど現代と極東にうっすらと紅玉の国の伝統衣装のニュアンスを織り交ぜられた衣装は、色味やつくりは女官たちのような熱帯魚とはいかないまでも天性の華やかさによって決して地味とは言えない。
「これは僧都さま」と呼びかけられた女官のうち一人が答えるのを聞き、軽く一歩踏み出して二歩めで残りの段をぴょんとショートカットした。
「ずいぶんと賑やかだけど、なんで？」
「今夜はかねてより若様のお望みがかない、お輿入れがございますもの！」
「あ、そんなことあったね」

フロイドは女官が言ったことを了承するかのように、二回ぽんぽんと錨で肩を叩く。つられて刺々しい魚のえらのようなイヤーカフと、いつも身に着けているチョウザメの鱗飾りがちかちかときらめいた。
「僧都さま、陸のおなごというのはいかほどのものなのでしょう！　よく海の上においでなさいますから、御存じでございましょう？」
それから迫られて、眉根にしわを寄せながら後ろに下がる。
「しらね。だってオレが海の上に顔を出すときなんて暴風雨の時だけだし。真っ暗だし。　なんか見えたって、今にも沈みそうな幽霊船だけで陸の女なんかいねーよ」
「まあ、そんな」
「あっそだ。忘れるとこだった。若様に言っておきたいことがあって来たんだけど」
「畏まりました、ただ今」
さっと女官が身を引き奥のドアを開けて出ていくのと同じくして、下手側に行きながらいつもの緩やかな表情を経由し色の違うたれ目を静かに謹んで控えた。

９２　匹目のクラゲ

いやフロイド・素・リーチかよ

９３　匹目のクラゲ
御殿のセット、あれうちの寮の内装を参考にしてるっぽい？
なんか雰囲気似てるし、こないだ建築とインテリアにうるさいうちの寮のヤツに囲まれてたし…

９４　匹目のクラゲ
せやな、大道具やった友人からポムを参考にしたって聞いたけど
あんなにうまく極東や紅玉の国風に落し込めるもんなんだな……

９５　回目の宴
実況にないけど冒頭のプロローグ部分でのアズールの独唱からの剣舞は見事だった！
そこから女役の扇子の舞へのつながりもすごいな、見惚れちまった！
音楽も作ったのか？　雰囲気に合ってる不思議な音楽だったぜ！

９６　匹目のクラゲ
スカラビア、宅配の大口注文で談話室での上映が認められた話マジかよ……

９７　匹目のクラゲ
たこちゃん歌うま……さすが人魚……監督生に歌を叩き込んだだけのことはある……

９８　１―Ａのクラゲ
＞＞９７　うちの寮長のことだから「僕の相手役が音痴では格好がつかない」とか言ってそう
まぁ十中八九監督生が押し掛けて行ったんだろうけど
なぜならあいつはそういう女だから

９９　匹目のクラゲ
１―Ａの肩書にこんなに説得力あったことってある??

１００　匹目のクラゲ
まぁ大人しく見てようぜ

１０１　オルト@実況

さっと薄手の外套をなびかせて登場し、中央の一段高い床の端に立ったアズール。

たっぷり布を用いた衣装は極東の直垂という装いに近いが、チョーカーや繊細な細工の冠、腰の上から巻いた帯や豪華な青紫と金の飾り紐が目新しく、銀や青緑や水浅葱で染められている。

さらに舞台向けに偏光グリッターをふんだんに用いたアイシャドウは衣装に見合い厳かながら華やかな印象を与えた。

「爺、なにか用か」

「はっ。ご休息の処、恐れ入ります。この度の件につきまして、先方にお遣わしになりました品品の類とその数を、念のために申し上げようと思いましてございます」

「あの娘の父親にやった。――たしか、陸で結納とかいうものか」

先ほどとの態度は一変し、錨の杖を女官の一人に預けて床に跪き弁えた態度のフロイドへ、涼しげを通り越して魔王もかくやという風貌のアズールは朗らかに話しかけた。

「はあ、いや、ご聡明な若様。若様には覚え違いでございます。

彼らの世界で言う結納と申しますのは、親と親が縁を結び仲人がその仲を取り次いで、婚約の目録やら祝儀やらを贈るものでございます。

ですが、この度先方の父親が若様のご支配なさります『わたつみの財宝』に望みをか

け、「もしもこの願いがかなうのであれば、見目麗しいたぐいまれな一人の娘を海底にささげる」との約束をしかと誓ったのでございました。

すなわち、彼の望んだ宝をお遣わしになりましたことによって、是非もなく誓いの通り娘を波に沈めたのでございまして――とすれば、お送りなされました宝の数々は、俗に娘の身代というものでございましょう」

フロイドが長く話し終えたのに頷く。

「なるほど、わかった。別に少しばかりのこと、知らせるには及ばん」

そして背を向け「ああ、いやいや」と引き留められて振り返り腕を組んだ。

「この爺が承りました上は、たとえ鱗一枚一草の空貝（うつせがい）と言えども、煩わしくお感じになるかもしれませぬが、必ず若様のお耳に入れなければならないものと極まっております。

どうかお聞き取りくださいますよう」

控えた五人の女官がしとやかに頭を下げ、「若様、お座へ」と一人が言う。運ばれてきた霞のようなミルク色の白い珊瑚の椅子は段の上、二脚の鮮やかなバラの色の赤い珊瑚の椅子は向かい合わせにそろえられた。

アズールが段の上の椅子に腰かければ、するりと着流しの裾を床に引いたまま身を向けて身代の内容を話し始める。

１０２　匹目のクラゲ
（ｔｈｉｎｋｉｎｇ　ｆａｃｅ）

１０３　匹目のクラゲ
待って待って待って情報が多い色々渋滞してるから待って
カップめん伸びちゃう
あと公子の登場の仕方、扉を開けて普通に出てきたのに女官率いてやってくるとか大物感パないし幻想的でいいですね

１０４　匹目のクラゲ
急にフロイド・誰・リーチにならないで
魔王面なのに快活そうなアズール滅茶苦茶違和感あるな
＞＞１０３　たしかに幻想的　水面みたいな照明の揺らぎにこだわり感じる……
演出家本気すぎでは???

１０５　匹目のクラゲ

雰囲気竜寮長なのに中身その副寮長って海版ディアソムニアか???
一人ディアソツートップしてるのか???

１０６　匹目のクラゲ
＞＞１０５　言いえて妙

１０７　匹目のクラゲ
何ともいえないヴィランフェイスなのは顔立ちのせいなのかメイクのせいなのか……
美人なんだけどさ……
流石ポム寮長

１０８　匹目のクラゲ
ディアソより人間っぽい感覚してるオクタが陸の文化でとんちんかんなこと言ってるとこいつら人魚だったんだなって思うわ

１０９　匹目のクラゲ

いやいやフロイド・爺・リーチめっちゃ歌上手いやん
実況書き起こしはできないだろうけどこれはすごいわ

１１０　匹目のクラゲ
聞き取れた分だけ↓「マダイ大小八千枚、ブリ・マグロ二万匹、カツオ一万本、大ヒラメ五千枚」
他にもいっぱい言ってた
魚河岸かな？

１１１　匹目のクラゲ
魚河岸ｗ

１１２　匹目のクラゲ
とにかくたくさんの贈り物を望んだんだな親父は
魔力なしの女一人にそんな価値あるのかねえ

１１３　匹目のクラゲ

>>112　やめとけやめとけw>>44みたいになるぞw

114　オルト@実況

「マダイ大小八千枚。ブリ、マグロともに二万匹。カツオ一万本、大ヒラメ五千枚。キス、ホウボウ、コチ、アイナメ、メバル、藻魚合わせて七百カゴ。ワカメのその幅六丈、長さ十五尋のもの百枚一巻九千連。アンコウ五十袋。トラフグ一頭。大ダコひとつがい。さて、別にまた、月の灘の桃色の枝珊瑚一株、丈八尺。周囲三抱えの分でござります」

歌詞じゃなくてごめんね！　でもこんな内容だよ！

丈や尋、尺は監督生さんの故郷の古い単位でこっちの単位に直すとこうなるよ。

ワカメ……幅18メートル、長さ15メートル

サンゴ……丈1．8メートル

あと、月の灘の桃色というのは、監督生さんの故郷で月灘（つきなだ）と呼ばれていた地域で採れたサンゴのコーラルピンクを表しているんだって。

台詞が難しいから大変だっただろうなぁ、僕は兄さんがプログラムしてくれるから完璧に言えるけどね！

１１５　匹目のクラゲ

オルトくんありがとう～

んなでけぇ海藻どうするつもりだったんだよ、一枚でそんだけってことは１００枚一巻きで９０００……???

???????????

１１６　匹目のクラゲ

えっぐい魚の量

マジで魚河岸じゃん

１１７　匹目のクラゲ

監督生の故郷≒極東の国だとするとマジで難しい言い回し多いんだなぁの国

そんなこと言ったら輝石も薔薇も独特の文化が多いけど、こっちのはなんとなくわかるけど極東はわからん

１１８　匹目のクラゲ

あそこだけなぜか別の文化生えてるよな～

１１９　匹目のクラゲ
いやでもさ海藻何に使うんだよ

１２０　１―Ａのクラゲ
＞＞１２０　監督生曰く、極東ではミソ（大豆の発酵ペースト）を溶かして味付けしたスープに入れて食べるのがオーソドックスなんだとさ

１２１　匹目のクラゲ
はぇー
人魚の食べ物　大体なま物
陸の上でも海藻は人気なんだもの
いつか食いたいぜ海でも甘いもの

１２２　匹目のクラゲ
＞＞１２１　急に韻を踏むな

１２３　匹目のクラゲ
売るのかな…さすがに食べきれないだろうし…

１２４　匹目のクラゲ
＞＞１２３　大方そうだろ
クソデカサンゴ家に置いておくとか何そのアジーム家

１２５　オルト@実況
「僧都」と呼ばれフロイドがあらためて手をついた。
「あれの親は、こちらから遣わした娘の身代とかいうものに満足したであろうか」
アズールの問いかけに対し、「御意」と丸く形のいい頭を軽く上げて答える。
「満足いたしましたからこそ、この御殿のお求めに従い美女を沈めたということでございます。
もっとも、マダイ、カツオ、その金銀の魚類のみでは満足をしませなんだが、続いて三抱え一対の枝珊瑚を夜の渚に差し置きますと、
山の端に出る月の光に輝きますのを夢心地で抱きかかえました時、あの父親は白砂にひれ伏し、

「ああ、龍神様、この命も捧げ奉りましょうぞ」と、そのご恩のほどを有難がりましたのでございます」
「親父の命などは御免だな。そんな魂を引き取ると、くらげが増えて迷惑をする!」
「あんなことをおっしゃいますよ」
女官が言うと一同は泡でも立ちそうなほど笑う。
「けれども僧都。そんなことで満足した人間の欲は浅いものだね」
ひとしきり笑った後、アズールは感慨深そうに呟いた。
先ほどまでそんな話をしていたというのと、彼が統べる海という財宝からすれば親父に授けた幾万の魚や立派な珊瑚などは水滴程度のもので、何一つ脅かされる要因はないからだ。
「まだまだ。あれは欲深い方でございます。
一人娘の身と交換に海の宝を望みましたのは、欲念が逞しいからでございまして。
……せいぜい人間同士において、女の体を炎の燃え立つような目立つ衣装に包ませ値打ちを付けて売り渡すくらいが関の山かと考えております」
「馬鹿だな」
人間の浅ましさを一蹴し、膝を手で打ちながら珊瑚の椅子から立ち上がる。
「恋しい女よ、望めば命でもやろうものを!」

そして腕を広げて豪語し「ははは！」と声をあげた。
明るい声に秘めた美しい娘を妻に迎えられる喜びを感じ取り、女官たちが控えたまま「若様にお思われになった娘御は本当にお幸せなことでございます」「早くお着きになればようございますのに」と口ぐちに言うのにアズールは段を降りながらうんうんと頷く。
すると正面に何かを見つけぱっと指をさした。
「あれだ！　あの一点の光がそれだ。ほら、お前達も見ないか！」
待ち遠しそうな表情で遠くの光を見つめる。

１２６　匹目のクラゲ
ハンネのクラゲってそういう……

１２７　匹目のクラゲ
>>１２６　どういうこと???

１２８　匹目のクラゲ
>>１２７　アズール「親父の魂など要らない、クラゲが増えて迷惑する」

つまり俺らは？

１２９　匹目のクラゲ
あっもういいです……

１３０　匹目のクラゲ
命でもやるってぞっこんだな
妖精ってこんな口説き文句するの？

１３１　匹目のクラゲ
＞＞１３０　しません

１３２　匹目のクラゲ
人魚もしません
自分の身が可愛いので

１３３　匹目のクラゲ

さすＮＲＣクオリティ

１３４　匹目のクラゲ

自分に嫁いでくる娘を待ち遠しく思ってる公子さ……無邪気なのはいいけどさ……

「せいぜい人身売買程度の認識」だって言われて、「人間バカだな～」って笑っちゃうあたりよくよく考えるとやべーって

んで笑顔で娘への恋しさを歌っちゃうんだからさ……いいかんじにまとめて幕を閉じちゃって暗転しちゃうんだからさ……

宴寮長みてーに無邪気だな～って思ってたけどそこまであの人人間やめた価値観してない……

１３５　匹目のクラゲ

生贄に自分の娘をささげて宝物を願うっていう思考がまず怖い

それが欲深いからって理由でたぶんおそらく親父はどうも思ってないのがもう人間怖い

１３６　匹目のクラゲ

＞＞１３５　これを考えた監督生の世界の作家もこえーよ・・・・・・・・・・・・・・・・・

１３７　匹目のクラゲ
娘も娘でなんで親父に海の王子に嫁げ＾＾って言われて受け入れたんだよ
もっとなんかあるだろ……

１３８　匹目のクラゲ
あらすじなんかもう最初から最後までクライマックスすぎるんだよなぁ

１３９　匹目のクラゲ
もうスケールが違うもん
なんなん極東の国

１４０　匹目のクラゲ
極東の国への熱い風評被害

１４１　匹目のクラゲ

人間の欲深さが怖い話なんですか海神別荘って
ハーツ寮初見勢真っ白になってるんですけど

１４２　匹目のクラゲ
>>１４１　情緒をドゥードゥルしてもらえ

１４３　匹目のクラゲ
情緒をドゥードゥルって何？

１４４　オルト@実況
暗闇の静寂に波の音が聞こえ、やがて蓮華の花飾りが付いた赤い提灯がゆらゆらと下手側から出て、同じ提灯だが白いものがもう一つ高いところに灯った。
さらに一つ二つと増えて五つになったとき、竜の頭飾りを付けた白い船が現れる。その船には大きな袖で顔を隠し、極東風の豪華な装束を身に着けた陸の美女が乗っていた。
手綱ほどの間隔をあけて先導するのは、市女笠をかぶった背の高い旅装の近侍。一番初めの赤い提灯は彼が持っていたものだった。

黒い鎧を身に着け、鋭い槍を片手に船の背後についているのは黒潮騎士たちだ。時折穂先や腰に白い提灯を結わえている。

「あなた、お疲れでございましょう。一休みなさいますか」

ふと、先導が振り返り止まった船へと静かに二、三歩み寄って屈み話しかけた。

ユウは目元まで袖を降ろして眩しさに目を細め、市女笠を外してわきに携えたジェイドをとらえて「ああ」と嘆息する。

「もし、どなたですか。私の体は足をそらにして…さかさまに落ちて……波に沈んでいるのでしょうか」

顔色の悪いユウが纏う白い振袖の裾には矢絣と赤い椿が咲き、赤い長襦袢と前で華やかに結んだ黒い帯のコントラストが美しく、結い上げた黒髪は花櫛や簪で飾られていた。

鮮やかに着飾った姿だというのに背もたれに寄り添いながら、掠れた声でそう言う。

「いいえ。美しい御髪（おぐし）一筋、波にも風にもお縺れになってございません。何でお体がさかさまなどと、そんなことがございましょうか」

混乱しているのだろう――と、ジェイドは穏やかになだめた。きっちりと着つけた着流しの模様と耳飾りは片割れと同じで、軽そうな素材の羽織や足を捌きやすい細身の袴の色は紫を基調とし、フロイドが奔放な派手さならば、こちらは静謐な貞淑さを押し出

している。

「いつか、――いつですか。昨夜（ゆうべ）か、今夜か、前（さき）の世ですか。

私が一人、舵も櫓もない舟に乗せられて波に流されました時…。父親の約束で海の中へ捕らえられて行く私への供養のためだと言って、船の左右へ、またあとさきに、波のままに散って浮く……蓮華燈籠（れんげどうろう）が流れました」

ユウは悪夢の微睡から少し覚めつつジェイドに食い気味にかかった。

「それは、水に目がお馴れではないあなたには道しるべ、また土産にもと存じまして。…これがその燈籠でございます」

「まぁ、灯りも消えずに…」

そして説明を受けて掲げられたそれに目を丸くさせる。娘の驚いた様子に煌々と赤い提灯に照らされた美丈夫の凛然とした顔がくすりと緩み、少し気が晴れれば良いと話を続ける。

「燃えた火が消えますのは、風の吹く陸だけのことでございます。一度この国へ入りますと、ここには風が吹きません。ただ、花の香りがほんのりと通うばかりでございます。

紙細工も珠に替わり、葉が青いのは暗緑色の見事な翡翠に、はなびらの紅白は、真玉（まだま）、白珠（しらたま）、紅宝玉（こうほうぎょく）になるのでございます。燃える灯も、このとおりに瞬きながら消えない星でございます」

あたりをぐるりと灯篭で照らし、再び向きながらにっこりと微笑む。
「ご覧遊ばせ、あなた。お召しものが濡れましたか、御髪も乱れはしておりますまい。何で、お体がさかさまでございましょう」
確かに言うとおり何も自分に変わりはない。それに安心させられたのか、ユウはやっと「ほう」と一息ついて胸に手をやり、ここに来るまでの回想を始めた。

１４５　匹目のクラゲ
あっ俺このシーン好きだ
何ともいえない空気感落ち着く

１４６　匹目のクラゲ
>>１４５　お前深海の人魚だろ

１４７　匹目のクラゲ
>>１４６　残念、クマノミでぇす

１４８　匹目のクラゲ

＞＞１４７　しんでしまえ

１４９　匹目のクラゲ
ジェイド・美・リーチ・・・・・・・・・・・監督生もなんなん・・・・・・・・・・・・・・
溜息がでたよ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

１５０　匹目のクラゲ
流石我が寮長、全てのシーンへの熱量とこだわりがすさまじい…

１５１　匹目のクラゲ
ボーテ
ああ　ボーテ
ボーテ

１５２　匹目のクラゲ
ポムフィオーレが軒並み息をしてないのうける

１５３　匹目のクラゲ

一体俺達は何を見させられてるんだ？

１５４　オルト@実況

「最後に一目、故郷の浦に近い峰に月がかかっているのを見たと思いました。しかしそれきりで、後は底へ引かれるように船が沈んで、私は波に落ちたのです。

ただ幻にその燈籠のような蒼い影を見て、胸を離れて遠くに行ってしまう自分の魂か、はたまた導く鬼火かと思いましたが…。

――ふと見ますと、前途の遙か下の方だと思われるところに、月が一輪、同じ光で見えますもの」

指さした上手の方へ、ジェイドは提灯を向けながら「ああ」と息を漏らした。

「あの光は…月影ではございません」

たおやかな声色で恐ろしいことを言われたとユウの顔色が再び悪くなる。

「で、でも、あなた。雲が見えます。雪のような。また瑠璃色のような空が見えます。そして真っ白な絹糸のような光がさします」

「その雲は波、空は水。一輪の月に見えますのは、これからあなたがお出で遊ばす碧玉殿でございます。――あそこへお迎えするのです」

これから自分が行く場所をよく見ようとわずかに体を前へ乗り出し、ぽすんと元の場所へおさまった。
「……。そして…そこへ行って、……私の身はどうなるのでございましょうねぇ……」
「フフ、何も申しますまい。ただお嬉しいことなのです。まことに、御目出度く存じます」
吐きだした言葉に口元を袖で抑え目を伏せれば、何がおかしいのかジェイドが微笑んで傅く。
目の前の人と会話がかみ合わない心細さに打ちひしがれて笑うしかなく、辺りを見渡して問いかけた。
「捨て小船に流されて、海の贄として取られていく。……、これが、はたして嬉しいことなのでしょうか。めでたいことなのでしょうか?」
「あなたのお国ではいかがでございましょうか。私たちのふるさとでは、もうこの上もないくらい嬉しい御目出度いことなのでございます」
不安を訴えてもなお柔らかな態度の相手に、まるで当たるような言い方をしたと思い申し訳なさと恥ずかしさに俯く。
「……あそこまでの道のりは?」
一瞬の静寂のあと、せめて話を変えようと眼下に見える一点の光を示した。

「あなたのお国でたとえるのは、難しい……。
おお、そうです、五十三次というものがあると伺いますが、その東海道を十往復、それを三百繰り返し…、三千度いたしますほどでございましょう」
「ええ、そんなに」
「ご安心ください。お乗りのその船は風よりも早いのでございます。お道筋は黄金の欄干白銀の波のお廊下…花の香りのする中を、やがてお着きなさいます」
ジェイドが言って再び市女笠を身に着け、薄紫のヴェールの向こうに顔が見えなくなる。すっくと立ち上がると船もそぞろに動き出し、半ばまで来たときに、蓮華燈籠のほかに青白い光がふわりと宙を漂い始めた。
「潮風、磯の香、海松（みる）、海藻（かじめ）の……、海の中は喉を刺す硫黄の臭いが溢れているところだと思っていましたが……本当にすずしい、好い香り。
……ですが、時々ぞっとする生臭い香りがしますのは?」
ふと袖で扇いで花の香りがするのを確かめた後、安らいだ表情を浮かべたが近寄ってきた灯火とともに異臭を感じて顔を遠ざける。
「人間の魂があなたを慕い、くらげが寄るのでございます」
「人の魂が?」と聞き返したユウヘ先を歩くジェイドは振り返らず、そのまま答えた。
「海に参ります醜い人間の魂は、くらげになってふわふわ彷徨って歩くのでございます」

ちりん、と静かな鈴の音が暗がりに反響する。

１５５　匹目のクラゲ
俺同年代にこんなこと言いたくないんだけどさ
言いたくないんだけどさ
ジェリチめっちゃ声エロいのな

１５６　モストロ後援会　会長
＞＞１５５　今更気づいたのか
ようこそモストロ後援会へ

１５７　匹目のクラゲ
うわなんかやべえの湧いてきたな

１５８　匹目のクラゲ
監督生がド美人過ぎてカップめん伸びた……

１５９　匹目のクラゲ
きのこうつぼもド美人だし
何この空間
幻想的が過ぎる

１６０　匹目のクラゲ
このシーン生で見たけどクラゲの立体映像？とかすごいリアルだった
匂いもしたし

１６１　匹目のクラゲ
＞＞１６０　鼻につくはき違えた金持ちのフレグランス系じゃなくて、ほんのり漂ってるって感じの本当に良い匂いだった……
あれはね、美人からしかしない匂い

１６２　匹目のクラゲ
演出家が軽率にクソデカ感情こじらせるタイプのオタクだからなあ

１６３　匹目のクラゲ
おたくの寮長さん引きこもりタブレット野郎って思ってたけど少しは見直そうかな
……

１６４　匹目のクラゲ
＞＞１６３　ポムポムさんや、その認識は合ってるから見直さなくてええで

１６５　匹目のクラゲ
草なんだば

１６６　匹目のクラゲ
この空間にジェリチの美声って眠くなりそうだ
魔法史先生とどっちが睡眠導入力高い？

１６７　匹目のクラゲ
比べるまでもないじゃろ

１６８　匹目のクラゲ
ところでまた新出単語ありましたね
ごじゅうさんつぎってなんですかオルトくん！

１６９　オルト@実況
監督生さんの故郷にある道だよ。長さは約５００ｋｍ！
由来は日本橋という橋から京都という都市までの、５３の宿屋の町をつなげたからだって。
道中にはたくさんの観光スポットがあるらしいよ。
この五十三次ができたのは、監督生さんが生まれるずうっと昔、車も自転車もなくて移動に馬や徒歩が使われた時代なんだ。

１７０　匹目のクラゲ
ありがとー。
５００ｋｍを３０００往復ってことは？
惑星何周分？
しれっと流したが監督生の故郷て魔法ないのが当たり前なんでしょ？

徒歩？５３もホテル経由すんの??やっぱ

１７１　匹目のクラゲ
＞＞１７０
１往復で１０００ｋｍ…
３００万ｋｍですね
７５周だわ

１７２　匹目のクラゲ
冥界行く方が近いんじゃね…???

１７３　匹目のクラゲ
実質冥界みたいなもんでしょ、これから監督生が行くところなんか

１７４　匹目のクラゲ
黒潮騎士の人もコーラス綺麗だし、監督生もいい声してる
ジェリチがメインボーカルだから安定感もあるし無限にきいてられる

つかオクタ全般的に歌うまくね…？……???

１７５　匹目のクラゲ
>>１７４　海のエレメンタリーでは歌と踊りの授業が多い
海の魔女が存命の時代からの伝統らしい

１７６　匹目のクラゲ
あの騎士の一人１―Ａで開催された第一回事務椅子レースクルーウェル杯優勝者くんだな

１７７　匹目のクラゲ
なにそのカオスの香りしかしないレースは

１７８　匹目のクラゲ
最後のハモリまで綺麗とか
これは生で見たくなる……チケットの状況確認しよ……

１７９　オルト@実況

アズールが椅子の前を行ったり来たりを繰り返し、これから迎える妻以外にもう一人を待ちかねている。段の上の白い椅子のそばにある赤い珊瑚の椅子には誰も座っていないが、下手側の斜め後ろの黒い椅子にはフロイドが座り足を組んでぶらぶらとやっている。

そして紅玉の国の古い学者の装いをした人物が下手側に設置された反り橋を歩き、女官に案内されて出てきた。

「ああ、博士！　お呼び立てをしました」

アズールが彼に話しかけながら飛びつくように大股で寄ると、静かに傅いて敬礼をする。そして「あれをごらんなさい！」と近づく一点の光を指さした方を、かけたメガネをかちりと動かし見た。

「千仞（せんじん）の崖を重ねた、漆のような波の間を、幽かに蒼い灯火に照らされて来る人は、この度ここに迎え入れる恋しい人なのです」

興奮のままに一息に言い切り、相槌を打つように博士は深々と頭を下げる。

「けれども、僧都は、「白衣に緋を襲ねた女子を馬にのせて、黒髪を縫うばかりに先の鋭い槍を支え持つというのは、かの国で引廻しとかいう罪人の姿に似ている、不吉だ、忌まわしい」と言うのです。

しかし、私は全くそうは思わない。
私の領分に入ったあの娘の顔は、白い玉が月の光に包まれたのと同様にますます清い。眉は美しく、瞳は澄み、唇の紅は冴え――いささかもやつれない」
うっとりと美しさをたたえるアズールに博士は「御意」と頷いた。そこで一区切りがつき、話を続ける。
「引廻しというのは、恥を見せるものでしょう？　苦痛を与えるのでありましょう？
槍で囲み、旗を立て、淡く清く装った麗しい人を馬に乗せて市中を練るように引廻し、やがて刑場に送って殺したところで、――殺されるものは平凡に病で死ぬよりも愉快でしょう。
それが何の刑罰になると言うのですか。陸と海という風に国が違い人情が違っても、まさか、そんな刑罰はあるまいと思う。
しかし僧都はうろ覚えながら、確かに記憶にあると言われる。……でもって、博士、あなたをお呼びした次第です。ちょっとお調べを願いたいのです」
アズールは振り返ってフロイドの方を見ながら、段の上へと足をかけて椅子へ腰かけた。
「今おっしゃられました記憶は私にもございますが、しかし、念のために調べまする。ええと、陸のすべての刑法の記録でありましょうか、それとも」

用件を聞き、博士が手に光り輝く洋書を呼び出すと小脇に抱えて調べる内容を尋ねる。

「面倒です。後はどうでもいい。ただ、女子を馬に乗せ、槍を立てて引廻したという、そんなことがあったかという、それだけでいいのです」

「ならば正史ではなく、小説とか浄瑠璃の中を見てみましょう。時の人情や風俗は、史書をひも解くより、むしろこの方が適当でありますので」

軽く頷いて本を開けば、墨で書かれた活字が五色の光とともに浮かび上がった。

１８０　匹目のクラゲ

えっ…何？

罪人を晒して処刑する？

１８１　個目のケーキ

ギロチンにかけるとき広場でやっただろ、ハートの女王は

それと同じだ

１８２　匹目のクラゲ

創作の物語だからエグさ軽減されてたのに急に現実の話もってこられると生々しくて嫌になるますね……

183　匹目のクラゲ

この王子情操が多次元宇宙の彼方にあるんか

184　オルト@実況

博士が朗朗と、少しばかり芝居がかった口調で本の内容を読み上げ始める。

「……――世のあわれとぞなりにける。今日は神田のくずれ橋に恥をさらし、または四谷、芝、浅草、日本橋に人こぞりて、見るに惜しまぬはなし。

これを思うに、かりにも人は悪しき事をせまじきものなり。天これを許したまわぬなり。

……この女思込みし事なれば、身のやつるる事なくて、毎日ありし昔のごとく、黒髪を結わせて麗しき風情。……」

そこまで読み上げると、「中略をいたします」と断りを入れた。

「……聞く人一入（ひとしお）いたわしく、その姿を見おくりけるに、かぎりある命のうち、入相（いりあい）の鐘つくころ、品かわりたる道芝のほとりにして、その身は憂き

煙となりぬ。

人皆いずれの道にも煙はのがれず、殊に不便はこれにぞありける。

――こういうことで、鈴ヶ森で火あぶりに処せられるまでを、確か江戸中を棄て札……罪人を処刑する際、氏名、年齢、罪状などを記した高札……に槍を立てて、引廻した筈だと理解しております」

「分かりました！　それはお七という娘でしょう。私の大好きな女なんです！」

聞き終わったアズールが楽しそうな笑顔を浮かべ立ち上がる。外套を翻しながら博士の手元の本を覗き込み、ぴしぴしとページを指先で突いた。

「御覧なさい。どこに当人は嘆き悲しみなどしたのですか。人に惜しまれ、哀れがられて、女自身は大満足で取り乱さずに平常心のまま火に焼かれた。得意想うべしではないのですか。

なぜそれが刑罰なんだね。もし、刑罰にするのであれば叩いて終わる、恵みの杖（しもと）情けの鞭だ！」

不思議がった表情のまま腰に手を当てて語り、女官たちも顔を合わせて頷きあう。

するとにやりと意地悪っぽい笑みを浮かべこうも言った。

「実際、その罪を罰しようと思うなら、そのまま殺さずに置いておき、平凡にグズグズと生きながらえさせて、皺だらけの婆にして、その娘の生涯を終わらせるのがいいと私は

思う。

――博士いかがですか。僧都も！」

さっきまで気丈だった女官たちが「あれ」「まあ」と袖で口を覆い衝撃を受ける。

どうだと問われたフロイドも「若様ひでー」と言いたげに顔をしわくちゃにさせ、博士は本を閉じて向き直り膝をつく。

「しかし若様、慎重にお答えをいたします。私は人間界の心も情けも、まだ少しも分からないのであります。若様がただ今仰られたこと、それはすべて海の中の規則にございます」

「あなたがお分かりにならなければ、これはもう、誰にも分からないのです。私にも分からない。…しかし、彼女を迎える道中のこの姿は別に不祥ではあるまいと思う」

「若様、その段、合点が行った次第でござります」

「よし」

博士の申し分に困ったように、しかし穏和に受け取った。正面の光を見据えて微笑む姿にフロイドも考えを改め、床に控える。

「では」と洋書をわきに抱えた博士が下手へと捌けていくやいなや、ぱっと場面が赤く染まり警鐘の銅鑼の音が響く。

女官たちが驚いて騒ぎたつ中、「何事だ！」と声を荒げてぱちんと泡を弾きその手に剣

を呼びだした。

１８５　匹目のクラゲ
なるほどな、わかったぞ

１８６　匹目のクラゲ
老いぬ朽ちぬがこの海の世界じゃ一番美しいことなんだ
まるで美しき女王のように、永遠の美貌こそがこの海では尊ばれる

１８７　匹目のクラゲ
〝理解〟ってしまったのか……
なんにせよ美しいままで死ぬのが幸せなことかどうかはわからんな

１８８　匹目のクラゲ
セミさんの役の、博士が持ってる本めっちゃ欲しいな
歌にもあったけどフランスのナポレオン?が読書家のおっさんに頼んで作らせた百科事典をひとまとめにオトヒメさまが加工した魔法の辞書…

欲しい

１８９　匹目のクラゲ
>>１８８　今の時代電子書籍というものがありましてだな……

１９０　匹目の蝶々
>>１８９　やめとけやめとけ、そいつはイグニだぞ
機械は１７００万に光らせてナンボの世界の住人だ
たとえアナログなものでも光るなら男のロマンってモンさ

１９１　匹目のクラゲ
>>１９０　蝶々君それってＴＷＬの話？俺の知ってるＴＷＬと違うんだけど

１９２　匹目のクラゲ
さらに言えば１７００万じゃなくて５色に光るんだけどなその辞書

１９３　匹目のクラゲ

ところで舞台の上でフロイド・爺・誰・素・リーチが暴れてる件については

１９４　匹目のクラゲ
＞＞１９３　なんでもつなげれば面白いってわけじゃねーんだぞ…！

１９５　匹目のクラゲ
殺陣ってやつだろ、これ
しってる

１９６　匹目のクラゲ
黒い鮫のホログラムをちぎっては投げちぎっては投げしている一方的殺戮なんて
……俺が知ってる殺陣と違う……

１９７　匹目のクラゲ
さっきまでの猫かぶり穏和爺フロリチも中々に恐怖だったけど
やっぱ俺らのしってるフロリチはこうでなくちゃな
「ギャハハハ!!!!」って爆笑しながら錫杖ぶん回してる姿が一番お前らしいよ……

アズールも剣で鮮やかに鮫を切り払ってるところ、見せることを意識してて素晴らしい

納得のボーテ１００点

１９８　匹目のクラゲ@慈悲寮裏方

彼は一度その気になればなんでもできる天才肌だけども…

今日は調子がいいみたいで何よりです

１９９　匹目のクラゲ

にしてもアクションもあるなんて面白いミュージカルだね

学生演劇にしてはクオリティが高いと思うよ

２００　匹目のクラゲ

読み上げの部分も凄い言い回しだな　何一つわからん…

２０１　オルト@実況

今はデータ不足で、僕もよくわからないんだ。次に回答するときはちゃんと答えられ

るようにしておくね。

セリフ文

「……――世のあわれとぞなりにける。今日は神田のくずれ橋に恥をさらし、または四谷、芝、浅草、日本橋に人こぞりて、見るに惜しまぬはなし。

これを思うに、かりにも人は悪しき事をせまじきものなり。天これを許したまわぬなり。

……この女思込みし事なれば、身のやつるる事なくて、毎日ありし昔のごとく、黒髪を結わせて麗しき風情。……」

「……聞く人一しおいたわしく、その姿を見おくりけるに、かぎりある命のうち、入相（いりあい）の鐘つくころ、品かわりたる道芝のほとりにして、その身は憂き煙となりぬ。

人皆いずれの道にも煙はのがれず、殊に不便はこれにぞありける」

意訳

「罪人の札を背負い、引きまわされるのを人がこぞって見ようとやってくる。これを思えば、人は決して悪いことはしてはならない。天は許すことなどないから。

この女はそう思い込んでいるだけで、昔と同じようにやつれることもなく黒髪を結って身ぎれいである」

「聞いた人間は憐れんでそれを見送り、その命も夕焼けの鐘がなるころには火あぶりと

なった。人はいつか死ぬけれど、これは特に不憫な有様だった」
こんな感じかな？
意訳は監督生さんがセミさんの台本にかいたものからの引用だよ。

２０２　匹目のクラゲ
オルトくんさんきゅ～
俺達もなんかやらかしたら寮長に首刎ねられるし首輪つけっぱだしある意味引き回しされてんのかもな…

２０３　匹目のクラゲ
＞＞２０２　おまえマブか？

２０４　匹目のクラゲ
ただの厳格寮生ですゥ
首輪と首刎ねでマブ認定されるのマジで遺憾の意なんだが

２０５　匹目のクラゲ

だったらおたくんとこの一年坊の手綱しっかり握っとけや

２０６　匹目のクラゲ

あっ、フロイドそこで捌けちゃうんか

逃げた鮫を追いかけていった

２０７　匹目のクラゲ

ここでやっとアズールと監督生が引き合うのか…長かったな……

２０８　オルト@実況

ちりりと鈴が鳴り、ユウがジェイドに片手を引かれながら静かに出てくる。深く俯いてやつれた様子だが、そこまで深刻な物ではない。

ジェイドは微笑みを浮かべながら「碧玉殿でございます」と手振りする。彼女がひとりでに歩き出したのに対し、御殿の主に一礼すると身を引き後ろに控えた。

――アズールは間近で見たその人に息をのみ、視線を外すことができずにいる。

ユウは気づかないまま御殿の美しさに目を奪われていたが、やがて遠巻きに近づいてきていたその人と目があって――歩みが止まった。

「良く見えた」
彼は優しく微笑みながら腕を伸ばしたが、ユウはその手を取らず崩れ落ちる。
「どうなさいましたか、あなた」
ジェイドが身を小さくした彼女を気遣ってその肩を抱いた。
「は、はい」声は震えているものの細くなくはっきり聞こえる。
「…覚悟してきましたけれども、余りと言えば、やはり恐ろしゅうございますもの…!」
「おお、若様。そのお刀をお放し遊ばせ。驚きなさいますのももっともでございます」
アズールは手をゆっくりと降ろし、これはまたどうしたことだ目を丸くさせた。そして、臣下が跪き願うので思わず自らが右手に持った剣を見下ろす。
「放してもいい――が、放さんでもよかろう。…最初に見たものはどこまでも付き纏う。しかし、あなた。これを恐れてはいかん。私はこれがあるがために強く、これあるがために威があり、今もすでにこれによって召使う女が入道鮫に噛まれたのを助けたのだ」
「此処は…そのような恐ろしい場所なのでございますか」
恐れて震えまでするユウに、無邪気なまでに明るくそれでいて威厳のある優しい声をかけるが、逆に怖がらせてしまったことに気づかないまま言葉を続けた。
「敵のない国が世界のどこにある?

仇は至る所に満ちているのだぞ。ただ一人の女を捧ぐ、海の幸を賜れ。あなたの親はすでにあなたの仇なのではないか。

閨にただ二人あるときでも私はこれを放しまいと思う。私の心はあなたを愛して、私の剣は、敵から仇から、世界からあなたを守護する。

弱いもののために強い」

ジェイドが髪飾りを崩さないように胸の内に支えながら、しっとりとした白い布地の背中をさする。

「毒竜の鱗を纏い、爪を抱き、角は枕してもいささかもあなたの身を傷つけない。ともにこの鎧に包まるるうちは、あなたは海の女王だ。放縦に大胆に、不羈専横（ふらせんおう）に、心のままにして差し支えない」

そこからするりと胸を離れてユウは顔をあげ、改めてアズールの方へと向く。乱れた裾をさらりと直し、手を付き直した。

「父へ、海の幸をお授けくださいました。…その津波のお強さと船を覆してこの遠い深海へお連れなさったお力。貴方の御威光は、よく分かりましたのでございます」

そして淑やかに会釈した上から、「そこへお掛け」と赤い珊瑚の椅子を手で示されて顔をあげる。再びジェイドが手を取って、椅子まで連れて行った。

２０９　匹目のクラゲ
やっとクソオヤジへの言及来たな
でも監督生の反応からして、親父を完全に悪だと思いきれてないっぽい？

２１０　匹目のクラゲ
どう見ても自分を売った（間接的に殺した）ヤツなのに…
恨みこそすれ、感謝するなんてありえんだろ
これも極東の文化？

２１１　１―Ｃのクラゲ
東方出身だが、子は親を立てろっていう文化は根強いな
年寄りを敬う気風はたぶんＴＷＬで一番強いと思う
だから別に、監督生が演じる陸の美女が親父を捨てきれない理由はわからなくもないただ僕から見ればこの親父は【過激な発言により規制】以下だ

２１２　匹目のクラゲ
また１―Ａかって思ったらＣだった

２１３　匹目のクラゲ
え。で、なんでアズールを怖がったの？
本当に毒竜に見えるの…???
ちょっと胡散臭さが抜けてるアズールっていう異常事態以外はふつうの人間ぞ…???

２１４　匹目のクラゲ
＞＞２１３　そうなんじゃね？
あのマレウス先輩を変なあだ名で呼べる程度には肝据わってるのに、
演技でも怯えてるところを見るのはなんかむずがゆいっつーか……

２１５　匹目のクラゲ
＞＞２１４　お前マブか？

２１６　匹目のクラゲ
＞＞２１５　えなんでわかったんすかこっわ……

２１７　匹目のクラゲ
マブだった

２１８　匹目のクラゲ
凄い価値観だったなこの王子
・自然は尊い、美しい
・人間はそれを見ようともしない
・自分たちのような力のあるものに守られることは喜ばしいことだ

２１９　匹目のクラゲ
＞＞２１８　傲慢極めてる……でもまぁ、監督生みたいに、翡翠の一枚岩とか珊瑚でできた椅子なんて見たら俺らでもたまげるだろうな……

２２０　匹目のクラゲ
歌にのせてるからこそダメージ少な目だけど
よくよく考えるととんでもないこと言ってるみたいなのよくある

２２１　匹目のクラゲ
昔からある童謡とか、エレメンタリーの女子の間で絶対流行る願いがかなうおまじないとかな
源流をたどると割とシャレにならない呪術だったり魔術だったりするんだよああいうの

２２２　匹目のクラゲ
これ生で浴びたら人間の情緒死ぬやろ……

２２３　オルト@実況
「あなた、仰る通りでございます。途中でも私が、お喜ばしいおめでたい儀だと申しました。決してお嘆きなさることはありません」
「いいえ、嘆きはしません。悲しみはいたしません！　ただ嘆きますもの、悲しみますものに、私の姿を見せてやりたいと思うのです」
宝石で飾られた宮殿や、無限に近い財宝。そんな世界に――海の女王として君臨する。自分はなんて幸せなのだろうと言いかねない勢いでユウは袖を振った。
「人間の目には見えません」

しかし、ジェイドは表情を変えずに言い放つ。
「故郷の人たちには？」
「見えない」
食い下がった彼女に、ため息交じりにアズールは答える。
ユウがやや意気込み身を乗り出して続けた。
「あの、私の親には？」
「あなたは見えると思うのか」
「こうして生きておりますもの！」
そう狼狽える白い背に語気を強めて追及する。
「無論生きています。しかし、船から沈む時、ここへ来るのに、どういう決心をしたのですか？」
「……死ぬのだと思いました。故郷の人も皆そう思って、とりわけ親は嘆き悲しみました」
「あなたの親が悲しむことなど少しも無かろう。はじめからそのつもりで約束の財を得た。しかも満足だと言った！　その代わりに娘を波に沈めるのに、少しも嘆くことはないではないか」
「けれども、そこには父娘の情愛というものがございます」

「勝手な情愛だね」
　アズールは呆れて頭を振った。それに曖昧にほほ笑んだユウは胸に抱いた袖を伸ばし、その様子を話す。
「父は涙にくれました。小船が波に放たれます時、渚の砂に――」
「じゃ、その枝珊瑚を波に返して約束を戻せばよかった」
　枝珊瑚を抱いたところだったと。その後の嘆きはもっと大きなものだっただろうと言おうとしたところに割り込み言い放つ。
「ですがもう、海の幸も枝珊瑚も金銀に代わり、家蔵に代わって――！」
「ではその金銀を散らして施し棄て、蔵を壊し家を焼いて、もとの網一つという貧しい漁民となって娘の命乞いをすればよかった。
　あなたの父はそうはしなかったろう。なぜそれが情愛なのです」
「はい。……」
　押し切られてか細い声でうなだれた。
「もしも、それが人間の情愛ならば情愛でよい。私とは何の係わりもない。が、私の愛する、この宮殿にいるあなたがそんな故郷を思って嘆いてはいかん。悲しんではいかんというのです」
　しおれた背に椅子から立ったアズールが近づき通り越したくらいで「おい」とジェイ

ドに声をかける。桃色の珊瑚であつらえた手箱にはそれはそれは美しいダイヤの指輪が収まっていて、それをユウの左手の薬指に嵌めると満足げに笑った。
その美しい宝石に目を奪われて……ユウは冷えた左手を右手で包む。

２２４　匹目のクラゲ
あああぁぁあああ……よりによっておまえおまえおまえそんなところを見てたのか……なんてこった……

２２５　匹目のクラゲ
人間が怖い系の話はＮＧです…
えっ初日って役職持ちや先生、監督生の知り合いがさ多くいたって話だろ…
ホールでテロ起きるだろこんなもん……
??????????

２２６　匹目のクラゲ
アズールの言うとおりだ……なんでそんなもんが情愛なんだ……娘どんだけわかんねえんだ……
今までは良くしてもらってたんだろうけど……

２２７　匹目のクラゲ
＞＞２２６　フロイド「せいぜい人身売買程度の認識」
人間に売った先で酷い目にあうよりアズールにやる（＝殺す）ほうがマシだって思ったんじゃね…⁇
貧しいみたいだったし、お宝が来なかったとしても…食い扶持が減るだけでもというかさ……

２２８　匹目のクラゲ
＞＞２２７　今回のオフへ大賞受賞
首を洗って待ってろ

２２９　匹目のクラゲ
ひ、ひとのこころがない……なんだ、なんだこれは……

２３０　匹目のクラゲ
これはほんとにネタバレも何も言えないって

２３１　匹目のクラゲ
スカラビアです、宴寮長が「なるほど、監督生の故郷ではそういう認識なんだな」って呟いてました

２３２　匹目のクラゲ
＞＞２３１　宴で有耶無耶にしよう
そうしよう

２３３　匹目のクラゲ
蛇副寮長が過労死するからやめろ

２３４　オルト@実況
「あなた、私は始めから決して歎いてはいないのです。父は悲しみました。故郷のものはあわれがりました。
ですが私は…約束に応じて宝を与えその約束を責めて女を取る、…それが夢ならば船に乗っても沈みはしまい。

もし事実として、波にに引き入るものがあれば、それは生（しょう）あるもの形あるもの、言うまでもなく心があり魂があり、声があるものに違いない。その上、威があり、力があり、栄えと光あるものに違いないと思いました！」

白いダイヤをきらきらと煌めかせながらそばを離れて嬉しそうに語る。

「ですから、人はそうして嘆いても、私は小船で流されますのを、慌て騒ぎも泣き悲しみも、落ち着き過ぎもしなかったんです。

もしも、船が沈まなければ無事なのです。命はあるんですもの。覆す手があれば、それはいきている手なのです。その手に縋って、海の中にいきられると思ったのです」

それを聞き届けたアズールはにっこりと笑い、「ああ！この女は豪いぞ！」とジェイドに投げかけた。

「慰めすかす必要はない。私はしおらしい哀れな花を自らの手で活けてながめようと思った。――が、違う！

これは楽しく歌う鳥だ。面白い。それも愉快だ。おい、酒を寄越せ！」

手を挙げればドアが開き、三人の女官が二瓶の酒と白銀の皿に一対の杯をささげて出てきた。ジェイドはユウの手を引いてさっきまで座っていた椅子まで連れていき、アズールはその向かい側の座へと行く。

それからジェイドが杯にそれぞれ種類の違う酒を注ぐと、一つをアズールに、もう一

つをユウへと手渡した。
「さあ、召し上がりまし」
桜のつぼみを逆さにしたような形状の翡翠と水晶のグラスにとろみのある桃色の液体が注がれており、渡されたはいいものの、戸惑っている彼女に傅いたまま勧める。
「私はお酒は少しも……」
「あなた、これは少しも辛くない」
「あなたの薄紅のお酒は桃の露、あちらは菊花の雫です。お国では御存じありませんか、海では最上の飲料（のみしろ）です。お気分が涼しくなりますよ。召し上がれ」
品よく杯を含みながらアズールが言った。
飲み物の説明をされて、あちらが持っている黄色い雫を見てから手元のグラスを灯りに透かす。
「まあ、……これが桃の露？」
恐る恐る口をつけ、半ば袖で覆い隠すようにし俯きながら飲んだ。口を離す刹那、「は」と小さく息を漏らし、改めて中身を見て微笑む。
「何という涼しい、爽やいだ――蘇ったような気がします」
「蘇ったのではないでしょう。更に新しい命を得たんだ」
震えながらジェイドが差し出した白銀の皿に杯を戻せば、無邪気に笑い声をあげた。

「嬉しい、嬉しい、嬉しい！　あなた、私がこうして生きていますのを皆に見せてやりとう存じます」
「別に見せる必要はありますまい」
　その様子を微笑ましく見ていたアズールは杯の中身を揺らしながら言う。
「でも人は私が死んだと思っております」
「勝手に思わせておけばいいではないか」
「ですけれど、ですけれども」
「その情愛とかであなたの親に見せたいのか」
「ええ、父をはじめ浦のもの、それから皆に知らせなければ残念です」
　そして皿に置きながら、低い声で問いかけた。
「帰りたいか、故郷へ」
「いいえ、この宮殿、この宝玉、このお酒、この栄華、私は故郷などへと帰りたくはないのです」
「では、何を知らせたいのです」
　するとユウはきょとんとした顔で答える。
「だってあなた、人に知られないで生きているというのは、〝活きている〟のじゃないですもの」

２３５　匹目のクラゲ
現在モストロ、凍りつきました
イベント限定ドリンクの……それ…そういう意味があったんですね……

２３６　匹目のクラゲ
冥土（仮）の食べ物を提案した†心なき者†は絶対監督生だろ

２３７　匹目のクラゲ
桃の露、爽やかな後味でおいしかったです
ミントっぽい感じでぐいぐい飲める

２３８　匹目のクラゲ
菊花の雫はレモンかな？
花の蜜をイメージしたってあったから甘ったるそうって思ったけど全然そんなことはなかった
二つとも炭酸系じゃないから苦手な人でも飲めるよ、炭酸水で割ってもおいしいと思

うけど

２３９　匹目のクラゲ
これを見た後の食レポで飲みたいと思うやついるか？

２４０　匹目のクラゲ
人に知られなきゃ生きている証にならないとは一体どういうことだ？

２４１　匹目のクラゲ
あの親父でこの娘なんだろ
ダイヤの指輪もらった時の顔見たか？
見た目が美しくても中身は欲望ドロドロの人間だ

２４２　匹目のクラゲ
うっわ最後まで人間怖い話かよ……

２４３　匹目のクラゲ

自分は立派な宮殿で栄華を極めた暮らしをしていると見栄を張りたいんだな…
こわ……人間こわ……

２４４　匹目のクラゲ
監督生が悦に入った顔で饒舌に歌ってるのがほろ酔い気分の酔っ払いみたいだし、めちゃくちゃ人間の闇って感じがする
そりゃなあ、ここにいていいって言われたらそうなるか

２４５　匹目のクラゲ
親に殺されたも同然なんだからな
陸に帰って自分はこうして生きて幸せだって言ってやらなきゃ気が済まないよな
少なくとも妾に囲まれて御殿を立てた親父よりはいい暮らしだろうし
でも果たしてそれが親子の情愛なんですかね

２４６　匹目のクラゲ
最初っから情愛なんてもんはないんだよ……

２４７　匹目のクラゲ
†闇にのまれた者達†

２４８　オルト@実況

どうしても見せたいと縋るユウを、アズールは憐憫とも呆れともつかない表情で見下ろす。

「あなたにその驕りと見栄の心さえなかったら、一生聞かなくても済む、また聞かせたくないことだった……」

跪いたユウが顔をあげ、その肩に手をかけた。

「ここに来たあなたはもう人間ではない。美しい蛇になったのだ」

「ええ！」

驚いて崩れ落ち、袖や背中、手を見る。

頬にも触れて指に引っかかるはずの鱗がないかも確かめた。

「…いいえ、いいえ！　いいえ!!　どこも蛇にはなってはおりません!!　い、一枚も鱗はありません!!」

醜い蛇に成り果ててないことを取り乱しながら叫び、対抗してアズールも声を張り上げる。

「無論、どこにも蛇にはなっていない！　あなたは美しい女です！
けれども、人の目というものは……。故郷に姿を現したあなたを見る目には誰の目にも残らず大蛇と映る！
ものを言う声は炎の舌がひらめくばかりで、吐く息は煙を渦巻く。悲嘆の涙は硫黄となって流れ草を爛らせる。長い袖は生臭い風を起こして木を枯らす！
悶える肌は鱗を鳴らしてのたうちうねる。肉親のものの目にだけ、その丈より長い黒髪が幾筋か大蛇の背に引くのが見える。
……それがなごりと思うがいい」
ついにその視線は呆れを通り越して憐みの色が強くなった。背を向ければユウは呻きとも嗚咽ともつかない声をあげてうずくまる。
「嘘です…、嘘です…！　人を呪って…人を詛って、あなたこそ毒蛇です!!」
跳ねるように起き上ったと思えば指をさして糾弾した。白珊瑚の椅子に戻ろうとする足を止めたが、振り返ることはない。
「親のために沈んだ身が蛇に姿を変えるなどあろう筈がない……！
やってください。故郷へ帰してください！」
その外套に縋って懇願すれば、目線の代わりに優しげな声が――憐憫に満ちた声が落ちる。

「大自在の国だ。勝手に行くがいい。そして、試すがよかろう」
「どこに、故郷の浦は……どこに」
「あれ、あそこに」
ジェイドは取り乱した彼女の肩を抱き、正面を示した。

２４９　匹目のクラゲ
いよいよクライマックスだ

２５０　匹目のクラゲ
うぉすげえ!!!!!!!!

２５１　匹目のクラゲ
白い大蛇が舞台をのた打ち回ってる
これ魔法…じゃなくて人間が動かしてるのか、あえて人間が裏でやるってのがいい演出

２５２　匹目のクラゲ

この蛇は監督生…人間だっていう暗示……
これはこじらせオタクの仕業

２５３　匹目のクラゲ
親のために死んだ身が蛇に姿を変える、か…
そういや監督生は異世界人だったな…

２５４　匹目のクラゲ
【サーバー管理者により当該のレスは削除されました】

２５５　匹目のクラゲ
【サーバー管理者により当該のレスは削除されました】

２５６　匹目のクラゲ
あれ珍しい、鯖ＡＩじゃなくて鯖缶の手が入った

２５７　匹目の蝶々

Ｐｌｅａｓｅ　ＤＯＮ，Ｔ　ＴＯＵＣＨ　ｔｈｉｓ．

２５８　匹目のクラゲ

りょ…

２５９　匹目のクラゲ

ところでこのナレーションはなんて言ってるの？

２６０　オルト@実況

「〝鱗で爪で角で愛す。そして世界からあなたを守る。〟

生きる国は違えども、強い男のその言葉を聞いて女の心が揺れた。

陸の女は海の命を飲み干して、その生死は大自由大自在。永久の命を持つこととなりました。

〝生きている姿を父に一目見せたい。〟

海の世継ぎの言葉も聞かず、女は陸へと飛び去った」

「ああ懐かしや我が故郷。

訪ねる我が家の軒先で人は女を大蛇と見る。

ああ悲しや陸の女。
すでにその身は海のものとなりましたが、しかし真の心を見てほしかった。
なぜ見てくれぬ、見てくれぬ……。
悲嘆にくれた陸の女が海の底、碧玉殿へと戻りました」

２６１　匹目のクラゲ
オルト君無言は怖いよ…
体は大蛇だけど心は女のままで、人はそれがわからないから恐れて……
ほんとこれ、あれ、だよな、あれ

２６２　匹目のクラゲ
>>２６１　監督生……
いや監督生にとって海の世継ぎ的立場のやついなくねぇか????
>>４４ことサファルくんは監督生はモテないって言ってたし
なあ？

２６３　匹目のクラゲ

触るなって言われただろ…と思ったらＢＡＮられてない
うーん、でも娘みたいに見栄張れるような扱いじゃないからなあ監督生さん……
ガラスの靴の姫の物語に出てくる、屋根裏で暮らしてるぼろきれの娘っぽいし

２６４　匹目のクラゲ
＞＞２６３　その娘だって最後は王子と結ばれてチャンチャンだったろ
監督生にはその王子がいねえんだって話

２６５　匹目のクラゲ
この海神別荘じゃ公子がいるのになぁ
つか公子めちゃくちゃアホだよな、見た目の美しさで嫁取りした結果とんでもなく俗な人間だったんだもの……
見た目が全てな物語じゃんかよこれ

２６６　匹目のクラゲ
ウッ現実を突きつけないで……みんながみんな寮長副寮長ズみたいに見目麗しいキラキラＤＫじゃないんで……

２６７　匹目のクラゲ
でもどうしても生きてる姿を見せたいって言ったところは本心なんだろうなってい
うのはナレーションで分かった
よかった人の心があって

２６８　匹目のクラゲ
＞＞２６７　邪推する俺らの方が人の心なかったりしてな　ガハハｗ

２６９　匹目のクラゲ
＞＞２６８　なにわろてんねん

２７０　匹目のクラゲ
こちらスカラビア
宴「蛇になった監督生も綺麗だよなー、へへっ」
蛇「あれは作り物だぞ」
宴「でも、本物になればきっとアラバスターみたいな白い鱗や金色の瞳が綺麗な蛇に

違いないだろ？」
蛇「お前と意見が同じになるのは癪だがその通りだな」
以上主従の会話です

２７１　匹目のクラゲ
ヤバババビアやめろ

２７２　匹目のクラゲ
ヤバババビアってなに????

２７３　オルト@実況
「故郷はどうでした」
悠然と椅子にもたれたアズールが倒れ伏し、背中をジェイドにさすられているユウに呼びかけたが、反応はない。
「どうした、私が言った通りだろう。あなたの父の妾は、その恐ろしい蛇の姿を見て気絶した。父は下男とともに、鉄砲を持ってその蛇を狙ったではありませんか。
彼らは第一、私を見てさえ、蛇体だと思う。人間の目とはそういうものだ。そんな処

に用はあるまい。泣いてはいかん」
　ぐすん、としゃくりあげた音が聞こえてアズールは眉をひそめた。彼なりに励ましの言葉を言っているはずなのだが一切聞こえていないようで「おい、泣いてはいかん」ともう一度言う。
「若様は悲しむのがお嫌いです。ここは楽しむ処、歌う処、舞う処、喜び、遊ぶ処ですよ」
　そうは言っても――泣き止まない。
「ええ、ええ。――あなた方は楽しいでしょう、嬉しいでしょう！
　私、私は泣いて、泣いて、泣き濡れて死ぬんです……！」
「死ぬまで泣かれてたまるものか。あんな故郷に何の未練がある。さあ、機嫌を直せ。ここでは悲哀のあることは許さんぞ」
　一度故郷に帰して、人間がどういう目で自分たちを見るのかを教えればこの女は満足すると思っていた。しかし悲嘆にくれ、泣いて死ぬと言うのだ。
「お許しなくばどうなりと。ええ、故郷のことも、私の体も、皆あなたの魔法に違いありません!!」
「俺の……魔……法だと…!?　お前を蛇だと思うのは人間の目だと言うのに、まだ疑うのか!!　…ええい…許さんぞ、女、悲しむものは殺す！」
　びり、と空気が張りつめて震える。飛び起きたユウはアズールをにらみ、いよいよ自

棄になって叫んだ。
「ええ、ええ、お殺しなさいませ。もう、活きられる身体ではないのですから！」
それを聞くや否や憤然として立ち上がり告げる。
「黒潮等はおらんか！　この女を処置しろ！」
黒潮騎士たちが上手から下手から現れ、一人はその槍をユウへ向けた。
「ああ、若様！」
ジェイドが飛び出してその間に割り込む。やや間があり、そこから彼が動かないことを認めたアズールは投げかけた。
「止めるのか」
「お床が血に汚れはいたしませんか」
「美しい女だ。花を毟るも同じこと、花片と蕊とがばらばらに分かれるばかり。あとは手箱にしまっておこう」
ジェイドを振り払い、頬に涙の痕がつたうユウを冷たく見下ろす。
「――殺せ」
二人がかりで両腕をつかみあげて引き立たせ、乱れた振袖の裳裾を縫わんばかりに槍を突きつけ縛（いまし）める。初めに槍を向けた騎士が槍を顎に突き立てて貫こうとした瞬間、「あなた」とユウが低い声で言った。

「あなた、こんな悪魚の牙では嫌です。お卑怯な。見ていないでご自分でお殺しなさいまし!!」
鬼気迫った表情で喉を張り上げる。
「…みな、下がれ」
言いながら躊躇わず剣を抜き、黒潮騎士が縛めを解いた。つかつかと歩み寄り、銀の刀身を彼女の目にかざしてひたりと斜めに構え、見合う。
「ああ、あなた、私を斬る、私を殺す……」
その声は恍惚としていて。
「ああ。殺す」
目の涼しさ、眉の勇ましさ、気高さ、美しさ、顔の綺麗さ。
位の高さ、品の良さ。
故郷もなにも忘れられるほど、それは甘美である。
顔を見合わせたまま、ユウは莞爾と笑った。
「――――……嬉しい」

２７４　匹目のクラゲ

今すぐ殺して

あなたを殺そう
からの
愛してる
の流れ
ｉｓ
何？

２７５　匹目のクラゲ
待っって
こういう愛の物語ってあるの？
アリなの???

２７６　匹目のクラゲ
待って待って、実況の最後やっと監督生は毒蛇のアズールじゃなくて本当のアズールを見たってこと？

２７７　匹目のクラゲ

最初は財宝や津波の力強さを褒めてたのにやっと言及来たやん……えっ……そうなの……？

２７８　匹目のクラゲ
つか殺そうとした時のはなびらとしべに分かれるだけって表現がヤバい
手箱にしまうってなに？何するの？
剥製？剥製ですか？？剥製が許されるのはルクハンだけですからね？？

２７９　匹目の狩人
呼んだかな

２８０　匹目のクラゲ
呼んでません

２８１　匹目のクラゲ
計算高く命乞いじゃなくて殺してと懇願するのが相手のツボだと思ってるのか、本気で殺されたいのかわからんけど……

命が終わるって瞬間に、美しいものが美しいって感じることに気付いたんだろうか
だからって殺されることが嬉しいって言うのはおかしい
おかしいっていうか、たぶんこのものさしは俺らのもんだろうな

２８２　匹目のクラゲ
何度も言うけど踊りも歌も美しい……流石すぎる……

２８３　匹目のクラゲ
シーンの考察もそうなんだけど美しいがすぎるんだよ
全部が

２８４　匹目のクラゲ
これはこじれるわ

２８５　匹目のクラゲ
故郷も行くところがなく、ついには自分をめとろうとした人を怒らせて……
追いつめられた最後に、悲嘆にくれる自分を怒るほど愛してくれている人が終わらせ

てくれるなら嬉しい
って解釈はどうよ

２８６　匹目のクラゲ
＞＞２８５　それが一番正解っぽいな
海のものになったから、海の法律に従った…ってことにもなるし
自分を自分と見てくれなかった陸に見切りをつけたともいえる
にしても絵になるわこの人ら
ブロマイドとかいらんやろって思ってたけど買います

２８７　匹目のクラゲ
ＤＶＤも買おっと

２８８　匹目のクラゲ
チケット…空席……
売り切れ…？
そんな……

サムさん…

２８９　匹目のクラゲ
今さっき全公演埋まったで
キャンセル待ちやな

２９０　匹目のクラゲ
（・ω・）そんなー

２９１　オルト@実況
黒潮騎士たち、近侍が控える傍でユウはアズールに手を引かれて段を上にあがった。
「終生を盟おう。手を出せ」
言われるまま袖を軽く上げれば、手首の白い肌に刃が引かれて赤い血が一筋だけ小さな盃に滴る。返す切っ先でアズールも腕に刃を走らせれば、今度は紫の血がもう一つ用意された盃に落ちた。
「さあ飲め」
白い玉の盃を浅く満たした血。ユウは紫のを、アズールは赤のを持ち、互いに飲む。

すると――一斉に客席に紫と紅の花が星のように咲き、燈籠が明るく灯り輝いた。
「あれを見よ！　血を取り交わして飲んだらお前の故郷の浦の磯に、岩に、紫と紅の花が咲いた！　あれは何だ」
「見覚えのある花ですが、――私はもう忘れました」
指さした方に一同が見入っている間、アズールははっと思い出して博士を呼ぶ。
「……お呼びなされましたか」
「あの花は何ですか」
そして再びあの花たちを示しながら問いかける。
「存じ上げております。新奥様のお心が通い、折からの霜に一際色が冴えました。若様と奥様の血の面影、竜胆と撫子でございます」
本を開くまでもなく、傅いたまま博士は答えた。
「あなた、私の悪意ある呪詛でないのが分かっただろう」
アズールは盃を置き、ユウを腕の中に抱き寄せて満足げに頷く。
「…幾久しく」
少し項垂れて言った。
そして控える者たちに命じて下がらせ、ユウが離れて歩いていくままにさせる。一歩目に白い花が降り、二歩目に立ち止まってあたりを見渡す。三歩目を歩き出した時に音

楽が聞こえだした。
「…一足に花が降り、二足に花が香る。
今、三足目に…独りでに楽しき調が聞こえます！…ここは、極楽でございますか？」
信じられないと言った風に驚いて喜ぶ彼女を、心から楽しげに笑う。
「そんな処ではないぞ。女の行く極楽に男はいない。男の行く極楽に女はいない」
鎧の結び目に手をかけ手を伸ばす。ユウはその手を取るべく駆け寄り、しっかりと握った。
そのまま抱き寄せて囁く。
「…ここは、お前と私の場所だ」

２９２　オルト@実況
書き起こしはここまで！
あとは劇場で見るか、ＤＶＤを楽しみにしててね！

２９３　匹目のクラゲ
ありがとう
情緒が死んだよ

２９４　匹目のクラゲ
この後も何かあんの？

２９５　匹目のクラゲ
＞＞２９４　カーテンコールの前にちょっとしたショーがあるんだけど……
まぁ、それが…ウン

２９６　匹目のクラゲ
客席まで一斉に花が咲いて、燈籠が明るくなるの鳥肌立った…
今やってるラインダンスもそろってて見惚れる

２９７　匹目のクラゲ
その前のフロリチのソロもかっこよかったし、そこからのラインダンサーへのフリが綺麗だった
紺色のフィッシュテールのタキシードもゴリゴリに似合ってたし笑顔だしすげえやる気じゃん

２９８　匹目のクラゲ
曲は劇中の歌じゃなかったけどな、ショー部分は別枠？
どんだけ豪華なミュージカルなんだ…

２９９　匹目のクラゲ
ふわふわの羽根が可愛いけど全員野郎なのが残念

３００　匹目のクラゲ@慈悲寮裏方
監督生の故郷にある劇団の催しを再現してるらしい
そっちは劇団員全員が女なんだと
ヒゲ生やしたおっさんから男の子まで女が演じる、専門学校もある劇団だって言ってた

３０１　匹目のクラゲ
＞＞３００　ＮＲＣと真逆か……
そっちも見てみたいな～

３０２　匹目のクラゲ
＞＞３０１　再現はできるぞ
薬でな

３０３　匹目のクラゲ
魔法万歳（しろめ）

３０４　本目の毒
楽しんでいるようね
フロイドのソロからのラインダンスに始まり……
ここからのショーはアタシが力を注いだ独擅場。心して観ることね

３０５　匹目のクラゲ
はい寮長！

３０６　匹目のクラゲ

お美しい寮長のお力、目に焼き付けさせていただきます！

３０７　匹目のクラゲ
急に飛び出すなポムフィオーレ
本編の演技や踊りの指導もかなり熱が入ってたのにここから何が起きるんだ…？
うわ見たすぎる

３０８　匹目のクラゲ
感想を見て妄想するしかないな
チケットキャンセル待ちだし、ＤＶＤ待つしかないから

３０９　匹目の陰キャ
ヴィル氏は本編もショーの部分も演出にめちゃくちゃ口を出してきたでござるからな
久々にあんなに揉めた…。かなり命の危険を感じましたぞ……

３１０　本目の毒

滅多に外に出やしないアンタに演出のなんたるかがわかるはずないもの
機械のことはアンタが詳しいけれどね、餅は餅屋ってあの小ジャガも言ってたでしょう？

３１１　匹目の陰キャ
は？
ホール全体への立体ホログラムやスモークなどの効果のタイミングを演者と完全に同期することによってより魅力的に観客へ魅せる演出家としての仕事
美的感覚・舞台のセンスでは経験でヴィル氏に劣ってはいても、拙者には知識と技術がありますゆえｗ
そしてその点を監督生氏に任されたという事実は譲れませんが？

３１２　匹目の蝶々
揉めるな揉めるな、アンタその監督生に任された大仕事やってんだろ
ならいいじゃねぇか

３１３　匹目の狩人

ああ麗しのヴィル、眉間にしわが寄っているよ。
キミの顔に不釣り合いだ…、気にせずトリックスターの舞台を楽しもうじゃないか

３１４　匹目のクラゲ
お互いの力量をわかってるだけに頑固なところがぶつかり合ってる
しかもどんな理由でもめたのかだいたい想像つくのが草の生えぎわ

３１５　匹目のクラゲ
おぉ…

３１６　匹目のクラゲ
すげえ、舞台に階段!?
何段なんだろ

３１７　匹目のクラゲ
オクタ寮服っぽいタキシードだけど中央のアズールだけスーツが紫だ
しかもラインストーンで飾ってあるからめちゃくちゃキラキラしてる…

３１８　匹目のクラゲ
こう、大勢を従えて隊列を整えて…ってやってるの見るとこいつがボスなんだなって感じするわ
安定のソロだし

３１９　匹目のクラゲ
足元見ないで階段降りるの滅茶苦茶練習しただろうなあ

３２０　本目の毒
群舞よ
タキシードのようなフォーマルな衣装で激しい振りを踊るって話を聞いたときはアタシも驚いたけど、おかげで静と動のギャップが生まれて見ごたえのある場面になったわね
主役だけ大幅に衣装に変化を持たせたのは、小ジャガ曰く「トップスター」の特権だそうね

３２１　匹目のクラゲ
オクタでやったのは正しい
監督生がオクタに持ち込んだときはなぜ??って思ったけど
これは正解だ

３２２　匹目のクラゲ
ポムフィオーレには毒寮長のほかに舞台や芸能に造詣の深い生徒はいる
でもこの空気はオクタヴィネルにしか出せないだろうね

３２３　匹目のクラゲ
音楽に合わせてフリがぴったりはまるの気持ちよすぎなのと周りの生徒への流し目が高校生らしからぬオーラ出てる

３２４　匹目のクラゲ
タコ寮長だけじゃなくて群舞やってる全員がそうだから、つい昨日まで声変わり薬で全員猫せんせーボイスになって馬鹿笑いしてたお前らか????って混乱した

３２５　匹目のクラゲ
いやタコ寮長が突き抜けて色気が出てるんだって
毒寮長プロデュースがヤバいのか監督生の持ち込みがヤバいのかこれもうわかんねぇな

３２６　匹目のクラゲ
よく見たらたこちゃんの隣固めてるリーチ兄弟の衣装も他とちょっと違うのな…
ボウタイちゃんと締めてるフロリチレアすぎる

３２７　匹目のクラゲ
＞＞３２６　そそ、ジャケットは他と同じ黒なのにラインストーンが張ってあるんだよ
これも特別感の一種なんだろうな

３２８　匹目のクラゲ＠奮励衣装部
＞＞３２６　あのボウタイ、実は結んでるんじゃなくてシャツの方に縫ってあるんですよ…

リボン締めるのはヤダって言ってたフロイドさんと交渉を重ねた結果こうなりました…

ラインストーン貼り付けるのも結構苦労しました……監督生さんのお手伝いほんと助かりましたありがとう…

衣装部からは以上です……

３２９　匹目のクラゲ

＞＞３２８　いやこれはお疲れ

あのウツボを相手取るのは大変だったろうに

３３０　匹目のクラゲ

最後のポーズ決めるところかっこよすぎか???ジェリチのしたり顔もフロリチの笑顔もアズールのドヤ顔もええやん……ええやん…?

いやタキシード似合うわこの人魚

あと息切らしてないのやべーね

３３１　匹目のクラゲ

次はなんだ？

３３２　匹目のクラゲ
次は監督生が女役つれて階段から降りてきたな
ドレス…ドレス似合うな……ちょっと可愛いぞ…

３３３　匹目のクラゲ
ボリュームのないすとんってしたドレスだけどスカート部分の布量マシマシだから
ターンするとぶわって広がって綺麗
ダンス向きのドレスってあんな感じなん？

３３４　匹目のクラゲ
あっすぐ捌けてった

３３５　匹目のクラゲ
残念……もうちょっと見てたかったな

３３６　匹目のクラゲ
群舞も凄かったけど女役混ざるだけで華がある
音楽がビックバンド風でゴージャスだからか？

３３７　匹目のクラゲ
どうしてこれをＶＤＣでしなかった

３３８　匹目のクラゲ
＞＞３３７　やる機会じゃなかった

３３９　匹目のクラゲ
監督生だって忙しいからなあ…マブの世話とか青タヌキの世話とか学園長の介護とか

３４０　匹目のクラゲ
＞＞３３９　学園長だけ介護で草

３４１　匹目のクラゲ
生まれて初めて質のいいショーとやらを見てる気がする

３４２　匹目のクラゲ
演者が楽しそうなのがいいよな…
思わず拍手してしまう

３４３　匹目のクラゲ
イグニハイド、廊下に歓声と拍手が漏れてきています
寮長のドヤ顔が浮かぶ浮かぶ

３４４　匹目のクラゲ
ハーツ談話室は大盛り上がりだぞ
マジカメ投稿不可だからけーくん先輩が残念がってる

３４５　匹目のクラゲ
安定のムシューマジカメ

３４６　匹目のクラゲ
ポムフィオーレは寮長のプロデュースに釘づけで談笑の一つもありません

３４７　匹目のクラゲ
スカラビアでは寮長が楽しいショーに大盛り上がりです
生で見に行けないのを残念がってました

３４８　匹目のクラゲ
リーチ含めた数名だけ残してあとはどっかいって…？
衣装かえた監督生が階段から降りて来たな
あとこのムーディなＢＧＭ聞き覚えあんぞ

３４９　匹目のクラゲ
＞＞３４８　モストロのＢＧＭじゃね？
テンポとか違うフレーズ入ってるけどおおむねそれっぽい

３５０　匹目のクラゲ
ここでモストロＢＧＭ!?

３５１　匹目のクラゲ
待って
待って

３５２　匹目のクラゲ
ジェリチのソロはやべえって!!!!!!!
エッッモ!!!!!!!!!

３５３　匹目のクラゲ
監督生の黒いドレス綺麗すぎる……本編での伝統装束の模様入ってるけど現代っぽくて…
同じ色のチュールを重ねてるからさっき着てた紫のドレスよりもふわふわしてるし、まとめて上げた髪につけた小さめの花のティアラもかわいい……
デザイナーは神だと思う

３５４　匹目の陰キャ
こんにちは神です

３５５　匹目のクラゲ
＞＞３５４　お前かよ

３５６　匹目のクラゲ
顔がいい人魚たちを手玉にとって踊ってるって感じが最高にエモい

３５７　匹目のクラゲ
うわうわうわうわウツボが監督生持ち上げて回ってる!!!?!??!!!ドレス!!!!ドレスが広がってええええ!!!!!!!!!!!!!!!!??!?!?!??!!!!!?!?!??!!!

３５８　匹目のクラゲ
＞＞３５７　もちつけｗ
見栄えするから迫力あるよな

３５９　匹目のクラゲ
リフトっていうダンスの技術だね
お互いの息が合わなければ危険な技だけど見事に物にしている……

３６０　匹目のクラゲ
監督生ぶん回してるフロイドここ一番のド笑顔で草

３６１　匹目のクラゲ
ここのジェリチのソロの歌詞ってわかったやつい る？

３６２　オルト@実況
はーい！
「あなたを愛し　あなたに焦がれ
口づけをした波へ　寄せた想い」
「今でも心は　あなただけを映し
泡になろうとも　愛は消えない」
ちなみにフロイド・リーチさんのはこんな感じだったよ

「美しき夜　愛の夜明け
　黎明の遥か　遠く風が吹く
　美しき人よ　清らな夜更けに
　頬を撫でる風　あなたをいざなう」
「夜のとばりに　見る夢の中
　燃え上がる星が
　愛しあい微笑みを交わす
　恋人たちを照らし出す」

３６３　匹目のクラゲ
＞＞３６２　甘ッ
いやありがとなオルトくん

３６４　匹目のクラゲ
この歌詞はあれですね、人魚姫の話を題材にしてるっぽい
そういう歌は海にたくさんあるし…
フロリチのはしらんけど

３６５　匹目のクラゲ
だからってエエ声でしっとり歌い上げられていい歌詞じゃないだろ
女になるわ

３６６　匹目の狩人
作詞は私だよ

３６７　匹目のクラゲ
＞＞３６６　お前かよ

３６８　匹目のクラゲ
ジェリチ待って
それはエロい
監督生の腰に手を回す手つきがエロい
これはエロい
声もエロい

なんかねじれそう

３６９　匹目のクラゲ

うぉぉぉぉ!!!!!たこちゃん再登場きた!!!!!!!!!!

３７０　匹目のクラゲ

衣装おそろいタイキシードの模様とか色とかおそろい!!!!!!!!!!ッッッカーーーーーーーーー!??!??!?!??!?!!!!!!!!

３７１　匹目のクラゲ

お゛あ゛あ゛あ゛あ゛～～～～!!!!

３７２　匹目のクラゲ

オ゛ア゛ア゛～～～～!!!!

３７３　匹目のクラゲ

発狂した勢いでルチウスくんになるのやめてもろて

３７４　匹目のクラゲ
いや弾ける笑顔やば
あの人あんな胡散臭くない弾ける笑顔できんだな…やべえな……

３７５　匹目のクラゲ
二人きりで舞台で踊ってる…??
何この場面……
俺達なにを見させられてるんだ…??

３７６　本目の毒
このデュエットダンスはアタシの肝入りよ

３７７　匹目のクラゲ
ありがとうございます
狂ったわ

３７８　匹目のクラゲ
今度からあいつらをどういう目で見ればいいのかわからない　助けて

３７９　匹目のクラゲ
見つめ合ってるし笑顔だし顔近いし綺麗だし
感情の洪水起きてる

３８０　匹目のクラゲ
あれ目から汗が…

３８１　匹目のクラゲ
画面が見えない……なんでだ……??

３８２　匹目のクラゲ
監督生腰ほっそ
タコちゃんの腕回されてる図ジェリチ以上の破壊力あるぞこれ

３８３　匹目のクラゲ
ゆるく後ろから抱きしめられてるの〃〃〃〃 愛〃〃〃〃 を感じる…
さっきの歌詞ってもしかしてさ……
いやまさかな…

３８４　匹目の陰キャ
なな何何何に気付いたの

３８５　匹目のクラゲ
動揺してて草

３８６　匹目のクラゲ
スモークで足隠れててさ、そんな中でエモい音楽に合わせて抱きしめあって揺れてる
二人とかもはや恋人なんじゃねえのかって話
付き合ってるでしょこれは

３８７　個目のケーキ

聞き捨てならないな

３８８　輪目の薔薇
ほう？

３８９　匹目の陰キャ
オタクの幻覚たくましくて草
しかし…お気づきになられましたか…ヴィル氏のこだわりポイントに……

３９０　回目の宴
面白いことを言うな～

３９１　匹目のクラゲ
静まりたまえ
静まりたまえ

３９２　枚目のマジカメ

いやこんなに男狂わせてたっけ???
待って待ってオレだけ話題に乗り遅れてない??
ちょっと―!

３９３　匹目のクラゲ
永遠に乗り遅れててい話題だからこれ

３９４　匹目のクラゲ
いやでもさ、あいつイソギンチャクのとき、寮を担保に取られたのは仕方ないとして、その前にアズールに凄い剣幕で啖呵切ってたんだぜ
作り物の笑顔じゃない本心で笑って一緒に踊ってるとか考えられんだろ…

３９５　匹目のクラゲ
あの不動のレオナを動かした監督生がしなやかで女の子っぽくて……あんなにバチバチやりあってたタコちゃんと笑顔で踊ってる……???

３９６　匹目のクラゲ

うちの寮長にかっこいい二つ名付いてて草

３９７　匹目のクラゲ
お互いに手を伸ばした後の間よ……切なそうな微笑みが刺さる刺さる…

３９８　匹目のクラゲ
※オバブロ鎮圧後に張り手されてメガネごと吹っ飛んだ男と吹っ飛ばした女です

３９９　匹目のクラゲ
あのアズールが女の子の張り手食らって吹っ飛ぶって文字面だけでも面白すぎるｗｗｗｗ
そしてその女の子と笑顔で踊ってる……？……なんだこの感情は…???

４００　匹目のクラゲ
ヒロインが悪役を好きになる系のＣＰド性癖すぎる…お布施します……通販ページとりあえず片っ端からポチるわ……

４０１　匹目のクラゲ
本編より狂わされてて草
やっぱ治安最悪と言われててもハッピーエンドラブラブものが好きなんですね～

４０２　匹目のクラゲ
ちちちちがわい
ショーに感動してるだけや

４０３　匹目のクラゲ
どうしようもないじゃん

４０４　匹目のクラゲ
はわ……抱き寄せて倒すあの…あの、アレすこ…

４０５　匹目のクラゲ
語彙力溶けてる溶けてるｗｗｗ
気持ちはわかる…

４０６　匹目のクラゲ
えっ待って今なんて言った??
えっ待って今なんでキスしたの???
待って待ってマジでちょ

４０７　匹目のクラゲ
愛してるって言ってなかった？

４０８　匹目のクラゲ
＞＞４０７　おま

４０９　匹目のクラゲ
＞＞４０７　ひぇ…ヴィル・シェーンハイトのパワーつよい……

４１０　匹目のクラゲ
愛してる↓キス↓ハグ＆頭ポンポン…???……???、?????

４１１　匹目のクラゲ
なんで同年代に狂わされてるんだ俺
?????

４１２　匹目のクラゲ
いや演劇でよくあるから、キスしてる演技は

４１３　匹目のクラゲ
演技か
そうだよなこれ舞台だったわ

４１４　匹目のクラゲ
ひとときの落ち着きを取り戻した
ありがとう４１２…

４１５　匹目のクラゲ
捌けるときの監督生が泣きそうな顔なのエモいな……感情移入してるんだろうな

……寮長のこと大好きなんだろうな……あれ…何言ってんだ俺……

４１６　匹目のクラゲ

＞＞４１５　４１２の言葉を復唱して

４１７　匹目の狩人

愛し合う男女のせめぎ合いとやりとりは古今東西、たとえ世界が変わろうと同じく美しい

ああ、本編ももちろん素晴らしいけれど、このショーは殊更トレビアンだよ！感動の涙と溜息が止まらない…！

４１８　匹目のクラゲ

歌うまいしダンスもできるしド美人だし、監督生人魚だったらどちゃくそモテるで……???誰だよ監督生モテないとか言ったやつ……こんな、こんな後輩がいて俺幸せすぎるのでは…???なんかもう自分が童貞だろうがなんだろうがどうでもよくなってきた……

４１９　匹目のクラゲ
いよいよ最後か……カーテンコールだよな？

４２０　匹目のクラゲ
なんか二人ほどやべえの通ってったな

４２１　匹目のクラゲ
カーテンコールも演目の一部!?

４２２　匹目のクラゲ
歌から始まってキャストがぞろぞろと階段から降りて来るの圧倒されるわ

４２３　匹目のクラゲ
手に持ってるのは本編に出てきた提灯？
あと全員衣装が正装っぽいなのはなんで??

４２４　匹目のクラゲ

見てればわかる

４２５　匹目のクラゲ
歌も本編に出てきたやつだし…いよいよ終わりって感じがするな…
いや楽しかった

４２６　匹目のクラゲ
公子と美女の愛…あれはハッピーエンドだったんだろうか…

４２７　匹目のクラゲ
＞＞４２６　ハッピーエンドだったろ
美女は殺されなかったし…
まぁ、親父はあれでのうのうと暮らしてるのが納得いかないけど

４２８　匹目のクラゲ
関係ないだろ、もう海の中で暮らしてるんだから

４２９　匹目のクラゲ
えっと…
最初に降りてきたのって髪だけは綺麗なウキタくんで、次にセミさん、んでリーチ兄弟…
カーテンコールって主役級が最後に降りて来るから次は監督生で最後にアズールかな？

４３０　匹目のクラゲ
とか言ってたら降りてき
!?
何故にウェディングドレス!?!?!?
長袖でシンプルで露出度０なのがエモいですね!!!?!?!?

４３１　匹目のクラゲ
この海神別荘って嫁入りの話だったじゃん
そういうことでしょ

４３２　匹目のクラゲ
最後までこだわりとこじれオタクの所業たっぷり

４３３　匹目のクラゲ
ってことは……

４３４　匹目のクラゲ
タキシード、じゃ、ない…だと…!?
極東っぽいけどシャツに蝶ネクタイだし、これは…？

４３５　匹目のクラゲ@奮励衣装部
ワヨウセッチュウって文化
極東と西洋の衣装をいい感じに混ぜた、ちょうど海神別荘がリアタイでできあがった時代にあった文化らしい
んで監督生とタコ寮長の衣装は結婚装束……つまり、このカーテンコールは結婚式なのです……

４３６　匹目のクラゲ
はぇ～……こだわり強…
ん？結婚式？

４３７　匹目のクラゲ
やっぱり付き合ってるじゃん

４３８　匹目のクラゲ
いやいや舞台だからこれ????もちつけ????

４３９　匹目のクラゲ
現実と舞台を一緒にするなおまいら
もうちょっと分別つけろ??

４４０　匹目のクラゲ
アズールの顔面は確かにいいけど、監督生は迷いなく張り飛ばした女だってことを思い出せみんな

４４１　匹目のクラゲ
何度聞いても面白いなそのエピソード

４４２　匹目のクラゲ
でも……そんな仲だったのに笑顔で手を取って踊るとかさ……

４４３　匹目のクラゲ
こいつは駄目だ手遅れだ

４４４　匹目のクラゲ
このキャスト全員が客席にお辞儀するのいよいよ終わるんだなって感じがして寂しい

４４５　匹目のクラゲ
わかる…だからリピってしまう…

４４６　匹目のクラゲ
遊園地から帰りたくない子供の気持ちになれる

４４７　匹目のクラゲ
＞＞４４６　そ　れ　だ

４４８　匹目のクラゲ
８８８８

４４９　匹目のクラゲ
あああああ緞帳が降りてしまうううう

４５０　匹目のクラゲ
８８８８８
よかった…
よかった

４５１　匹目のクラゲ
曲の終わり方が～Ｈａｐｐｙ　Ｅｎｄ～すぎる

４５２　匹目のクラゲ
８８８８８８８８８

４５３　匹目の陰キャ
観劇サンクス

４５４　本目の毒
こんなに人気になるなんて
アタシがかかわってるから当然だけど、妬けちゃうわね

４５５　匹目のクラゲ
通販ページ鯖落ちしてるｗｗｗｗｗｗ

４５６　匹目のクラゲ

鯖管理ＡＩが処理しきれなくなってんぞｗ

４５７　匹目の陰キャ
はいはい…

４５８　匹目のクラゲ
終わった後も大変っすね

４５９　匹目の監督生
大盛り上がりｗ
いやあみなさん見てくれてありがとうございました～！
ちょっと遡ったら地獄のような投稿が見れますね、楽しそうでなによりです

４６０　匹目のクラゲ
うわあああああああ監督生だあああああああ!!!!!見るな俺たちの発狂を!!!!!

４６１　匹目のタコ

僕と監督生さんが…なるほど
ヴィルさんの指示でやっただけですから、僕たちにはなんの感情もありませんよ

４６２　本目のキノコ
おやおや、僕に関しての言及もありますね
フフ

４６３　匹目のクラゲ
はわわわわ……

４６４　匹目の陰キャ
匂わせどころか真っ向から否定するんですな

４６５　匹目のタコ
ビジネスライクな関係と言って下さい

４６６　匹目の監督生

でも愛してるって言われた時かなり嬉しかったですよ
娘役は相手役を心から愛すべき、というあの劇団のしきたりに従って、フリをしてるだけだったのに

４６７　匹目のタコ
おや、そんなことをおっしゃって

４６８　匹目の陰キャ
何この会話
拙者何を見させられてるので？

４６９　輪目の薔薇
これが匂わせってやつじゃないのかい？
ボクの寮生だっていうのに、まったく乱れているよ

４７０　匹目のクラゲ
いつから監督生はうちの寮生になったんすか

４７１　匹目のハイエナ
タダで見れるんだったらって思って見に来たんスけど、まあまあ楽しめたッスよ～

４７２　匹目のクラゲ
あの寮長は起きたんですかね…

４７３　匹目のクラゲ
途中で匂いにつられて起きたが、あとは全く
なんつーか、見てるこっちが恥ずかしくなる話っつーか…

４７４　匹目のハイエナ
ジャックくん親父にキレてたじゃん
つかコテハンつけたらどうッスか

４７５　匹目のクラゲ
いや、俺はいいっす

４７６　匹目のクラゲ
初日は大変だったって聞いたけどどう

４７７　匹目の監督生
＞＞４７６　んっとねえ
ＳＳ席に先生とハーツラビュルファイブ、忘れないうちに誘ったツノ太郎、ポムフィオーレ三人衆がいて圧が凄かった
最終的に全員泣いてたけど、海神別荘って感動要素ある？

４７８　匹目のクラゲ
＞＞４７７　あなたがお分かりにならなければ、これはもう、誰にも分からないのです
私にも分からない

４７９　匹目のクラゲ
公子帰れｗ

４８０　匹目のクラゲ
たぶんショーの部分で情緒ぐちゃぐちゃにされたんじゃないかな…
もしくはラストの歌と怒涛のライト点灯……あれは感動する

４８１　匹目のクラゲ
まぁ付き合うならアズールはやめておいたほうがいいんじゃないか
誠実さが嘘っぽく見えるし

４８２　匹目のタコ
誰が結婚詐欺師だ

４８３　本目のキノコ
おやおや

４８４　匹目の監督生
胡散臭いのは否定しないけど…

私は誠実だと思います
じゃなきゃここまで正当に店を大きくできなかったと思いますし…

４８５　匹目のタコ
監督生さん…

４８６　匹目の監督生
ただし誠実さとやり口は別で考えるものとします

４８７　匹目のタコ
監督生さん?????

４８８　匹目のウツボ
うわあアズールかわいそｗ

４８９　匹目のクラゲ
寮長たちも意外と平気そうじゃなくてなんか安心してしまった

俺達パンピーと精神の作りは一緒なんですね

４９０　個目のケーキ

リドルはデュエットダンスで顔を真っ赤にさせてたな

４９１　輪目の薔薇

なっ

そ、そんなことはないよ

４９２　匹目のクラゲ

いやいや寮長、さっきの談話室での上映でも指の間からちらちら見てたじゃないっすかｗ

４９３　匹目のクラゲ

か監督生、すごく、き、き、きれいだったぞ

４９４　匹目のクラゲ
マブはマブで甘酸っぱいな～

４９５　匹目の監督生
初日も押しかけてきて感想だーーって叫んで帰っていきましたしねｗ
観劇ありがとうございました先輩、あとマブたちも

４９６　匹目の狩人
素晴らしきかな舞台…！
トリックスター、感想をしたためてオンボロ寮のポストに入れておくよ！

４９７　匹目の監督生
ポストが壊れない程度の厚さにしておいてください
それ以上は読めないので

４９８　匹目のクラゲ
いや草

４９９　匹目のウツボ
つーかさあ、小エビちゃんもホタルイカ先輩も遠まわしすぎじゃね
アズールもわざわざ否定することねーじゃん

５００　匹目のクラゲ
何を？

５０１　匹目のタコ
こら待ちなさい黙れ

５０２　匹目の蛇
なんだ
言えフロイド

５０３　輪目の薔薇
もったいぶらずにお言いよ

５０４　匹目の陰キャ
ちょ、ちょちょフロイド氏待って鯖落ちの処理してる間に何を言って

５０５　匹目のウツボ
だまっておくのも疲れるって言ってたじゃん
三人とも付き合ってるってこと

５０６　匹目の蝶々
Ｗｈａｔ，ｓ????

５０７　匹目の監督生
フロイド先輩ってば何を言ってるんですか
そんなはずないでしょ、イデア先輩とアズール先輩に迷惑がかかります
それに、愛し合ってるだなんて舞台の中の話ですよ

５０８　匹目のウツボ

まだ嘘つくんだ小エビちゃん
ほんとそういうところがムカつくんだよ
素直に「はいそうです」って言えばいいだろ

５０９　匹目の監督生
ギェ……ゴメンナサイ……ウソデス……
カントクセイ　イデア　タコチャン　スキ……

５１０　本目のキノコ
おやおや、バラしてしまいましたか

５１１　匹目のタコ

５１２　匹目の陰キャ
あ、あああああの拙者がそんな監督生氏をアズール氏と共有ドキドキヤンデレエンドとかそんなルート選択するはずないでござろう?????拙者非リア童貞ですし?????ななななななな何をおっしゃるのやら拙者の好みはらぶいちゃピュアラブルートですぞ???????

５１３　匹目のクラゲ
寮長の性癖とか死ぬほど知りたくなかった
イジれるネタが減るからリア充な寮長とか嫌すぎる

５１４　匹目の陰キャ
そこ????

５１５　匹目のクラゲ
あーほらたこちゃん真っ白になっちゃったよ
どうすんの

５１６　匹目のクラゲ
つか他の寮長たちいなくね？
どうした？
死んだ？

５１７　匹目の狩人
【ｘｘｘｘｘ＿ｐｉｃ．ｊｐｇ】

５１８　匹目のクラゲ
オカ板並みの無言貼り付けやめろし

５１９　匹目のクラゲ
＞＞５１７　は？

５２０　匹目のクラゲ
＞＞５１７　これは…ｗｗ

５２１　匹目のクラゲ
なんだった？

５２２　匹目のクラゲ
ボドゲ監が正座させられてて

周りに寮長副寮長が大集結

５２３　匹目のクラゲ

草なんだば

賢者の島坑道戦

賢者の島の港にある繁華街――といっても、この島は北端と南端に学校があるだけのド田舎なのでささやかなものなのだが――それでも、グリムにとっては初めての外出。

島中を巡り、港から南北へ伸びるただの地下鉄でさえ「それってスゲーんだゾ！」と目を輝かせて喜んでいた。

「ふなぁ～」

本来なら胸の高鳴りを抑えきれないはずなのに、エースの腕の中で何度目かの情けない泣き声を上げる。ぼうぼうと燃える耳も心なしか弱火だ。

「グリム、静かにしろって」

「だって、だって、こうなるなんて思ってもいなかったんだゾ」

窘めたエースでさえいつになく弱気になるのも無理はない。

耳障りな急ブレーキの金属音、衝撃、悲鳴があっという間に3人を襲い、それらが通り過ぎてから早くも３０分が経過しようとしている。

ちか、ちかと不安定に明滅する白いＬＥＤ。次の駅を知らせる掲示板は消え、広告も液晶にノイズが走り、この環境全てが感覚を敏感にさせて乗客の不安を煽った。

「……どうしようもない、な」

前の車両から戻ってきたデュースが手の甲で額の汗をぬぐい、崩れるように座席につく。

「だろーよ」

と、エースは当たり前のことだと吐き捨てた。

デュースが意を決して前の車両を見に行かなくとも……この事故が人為的に引き起こされたものじゃないとはわかりきっている。

中途半端に食いちぎられた車両――分断された人体の破片と、ガラス片と、電気によって火花を散らすコードか何か。ゆるやかなカーブを描いて先が見えないトンネルから吹き付ける冷たい風。

できるだけ見ないように、感じないように。それなりに修羅場を潜り抜けてきて肝が据わった自称優等生と比べて、自分は随分とちっぽけだ。

「ふな…」

「…鳴くなよ…」

窓の外はオレンジの灯りが点々と灯っている以外何もないコンクリートの壁。当然だ、ここは地下だから。

――逃げ場のない、地下なのだ。

賢者の島坑道戦

放課後、自主勉強のために開放されている講堂に足を運んだ監督生は、適当な空席を陣取って課題を広げた。

残りの3馬鹿は明日が休みなのをいいことに、遊びに行くとかなんとか言って外出許可証を片手に飛び出して行ってしまったし、久々に訪れたひとりの時間。

それを課題に使うなんて我ながら建設的。

「おやおや、監督生さん。その課題……」

「虎の巻は結構です」

「虎の絵巻ならウチにあるぞ？」

「違う、そうじゃない」

顔を上げて声の方を見れば胡散臭い笑みをたたえたアズール、リドルからの指摘にきょとんとしたカリムの姿があった。

「そう仰らず。隣失礼しますね」

「言いながら座らないでください。絡む相手間違えてますよ」
「オレたちも課題をやりに来たんだ。1年生のなら、オレでも教えられる内容があるぜ！」
「キミも遠慮がないね…」
そんなわけであっという間に包囲された監督生。席を立とうにも立てない状況に深いため息が出た。
「いつもの3人はどうしたんだ？」
「エースとデュースには外出許可を出したし、グリムまでいないとなると…。十中八九遊びに行っているんだろう」
「そーなんですよね。グリムはともかく、リドル先輩があの2人に外出許可を出すなんて信じられないんですけど」
「流石のリドルさんでも、正式な手続きを踏んだ正規の手段での外出には許さざるを得ませんよ」
「……そうだね」
渋々といった様子ではあるが。むぅと腕を組み、やがて口を開く。
「最近は真面目に勉強しているようだったし、息抜きは必要だと判断したのだけど…」
「確かに、なーんか妙に大人しいなってのは思ってました」

誰よりも厳格なリドルを説得し、納得させ、頷かせるには見える結果を出さなくてはならない。そして一生懸命に取り組んでいるという姿も。

そんなに今日という今日こそ麓に行くという決意が固かったのだろう。

「監督生はいいのか？遊びに行かなくて」

「私は…」

カリムの何気ない投げかけに監督生が言いよどむ。

「うーん、時々熱砂の国だとか、そういうところに連れてってもらってるので」

「へへっ！またそのうち連れてってやるよ！」

「ありがとうございます」

遊びたくないわけじゃないが、いまいち興味を惹かれないだけだ。

「外…外といえば、最近何かと物騒ですよね」

すると、アズールが勝手に監督生の教科書に〝Ｐ１８９、特殊な蒸留方法について〟と一言書き込んだ付箋を貼りつけながら話題を動かした。「そうなのか？」と首を傾げたカリムの周りでなにかと物騒なのは悲しいかな、いつもの事なのだがそういう意味ではない。

「この間なんて輝石の国、水晶の街で暴走した魔法生物による爆発事故があったそうですよ」

少し4人の間の空気が冷える。
「水晶の街…名前の通り、良質なクリスタルが採れる鉱山がある街だよな」
「そんなところで爆発事故と聞くと、…鉱山で起きた事故なのかい？」
「いえ、精選を行う工場で起きたようで。僕に聞くより、ネットニュースに取り上げられていますし、そちらを見てみるのがよろしいかと」
「あ、ああ、そうだね…。すまない」
リドルが引き下がるが、まだ情報を持っていそうなアズールに今度は監督生が問いかけた。
「もしかして、その魔法生物って工場の内部から出現したとか…？」
「おや、よくそんなことを思いつきましたね」
「どこから出現したのかとか、魔法機動隊（マジカルフォース）や軍隊が討伐したのかとか、そういう情報が詳しく載っていない場合もあるよな。きっと地元のやつらは不安がるだろうに」
「報道規制というやつだね」
「それで、アズール先輩どうなんです？どうせ知ってるんでしょう？」
さっきまで迫られて嫌がっていたのに今度は逆だ。どこか嬉しそうなアズールが眼鏡の反射でスカイブルーを隠し、くいっとブリッジを指で押し上げて何かを言おうとすると――。

「……！」

４人のスマホに一斉にグループの通知が届いた。

バイブレーション、あるいはけたたましいブブゼラ（ブブゼラはアズールのスマホから鳴った）がポケットや机を振動させ、表示された同じ文面にそれぞれの表情を見せる。

「あっ、課題全然進んでない！」

「安心してくれ、ボクたちもだよ」

「ジェイドだなこんなことをしたのは……！」

「噂をすれば影だな！行こうぜ」

そして一斉に席を立った。

賢者の島の港にある繁華街――といっても、この島は北端と南端に学校があるだけのド田舎なのでささやかなものなのだが――それでも、グリムにとっては初めての外出。

島中を巡り、港から南北へ伸びるただの地下鉄でさえ「それってスゲーんだゾ！」と目を輝かせて喜んでいた。

「ふなぁ～」

本来なら胸の高鳴りを抑えきれないはずなのに、エースの腕の中で何度目かの情けな

い泣き声を上げる。ぼうぼうと燃える耳も心なしか弱火だ。
「グリム、静かにしろって」
「だって、だって、こうなるなんて思ってもいなかったんだゾ」
窘めたエースでさえいつになく弱気になるのも無理はない。
耳障りな急ブレーキの金属音、衝撃、悲鳴があっという間に3人を襲い、それらが通り過ぎてから早くも30分が経過しようとしている。
ちか、ちかと不安定に明滅する白いLED。次の駅を知らせる掲示板は消え、広告も液晶にノイズが走り、この環境全てが感覚を敏感にさせて乗客の不安を煽った。
「……どうしようもない、な」
前の車両から戻ってきたデュースが手の甲で額の汗をぬぐい、崩れるように座席につく。
「だろーよ」
と、エースは当たり前のことだと吐き捨てた。
デュースが意を決して前の車両を見に行かなくとも……この事故が人為的に引き起こされたものじゃないとはわかりきっている。
中途半端に食いちぎられた車両――分断された人体の破片と、ガラス片と、電気によって火花を散らすコードか何か。ゆるやかなカーブを描いて先が見えないトンネル

から吹き付ける冷たい風。
　できるだけ見ないように、感じないように。それなりに修羅場を潜り抜けてきて肝が据わった自称優等生と比べて、自分は随分とちっぽけだ。
「ふな…」
「…鳴くなよ…」
　窓の外はオレンジの灯りが点々と灯っている以外何もないコンクリートの壁。当然だ、ここは地下だから。
　――逃げ場のない、地下なのだ。
「スマホも繋がんねーし…」
「それでも、他の乗客が外にある緊急用の電話で助けを呼んでくれただろ」
「……助けがいつ来るんだよ」
「…それは、わからない」
　申し訳なさそうに肩を下げるデュース。そんな友人に当たるような態度の自分に苛立って、カニと表現された髪をがしがしと掻いて舌打ちを最後にひとつ。
　ふがいなさを吐き出すことで少しでも気分を落ち着けさせたかった。
「…オレ様たち、ずっとこのままなのか？」
「そんなわけないだろ。助けを信じて待つんだ」

「子分～……」

ちょうど自分たちの席はドアの隣にあり、肘置きがある。そことエースの間に収まったグリムは少しでも安心を得ようと丸まってふなふな鳴いた。

「今頃勉強してるんだろうな…監督生」

「子分らしい真面目っぷりなんだゾ…」

「この期に及んで浮かぶのがそれかよ。オレもそれしか浮かばねーけど」

〝課題を後回しにするのではなく、課題より優先して学びたいことがある〟と宣った監督生の、見事な本末転倒っぷりが3人をドン引きさせたことは記憶に新しい。

少し緊張がほぐれた矢先、遠くからホイールが回転しているような轟音が近づいてくるのにグリムが気付いた。

「な、なんなんだ!?この音…!」

反響する音にすぐ二人も気づいて顔を見合わせる。

「これは…マジカルホイール…？違う、もっとデカい」

「もしかして、助けが来たってこと？」

「絶対そうなんだゾ！」

食いちぎられた虚空とは反対の方面からだ。

他の乗客たちが次なる異変に怯えて動くこともできない中、3人は音の正体を探ろう

と次々に車両をまたぎ、ついに最後部へたどり着いたときに――その正体を見た。
「なんだありゃ！」
エースが声を上げる。
反対車線のレールの上、停止しているのは人型のロボット。
全高は車両とほぼ変わらず４ｍ程度。直線の多いシルエットはずんぐりとしており、背後に取り付けられた二基のバーニアが一際目に入る。塗装の薔薇のような赤さが薄暗いこの場所でも鮮やかだ。
あまりにも唐突かつ、魔法機動隊（マジカルフォース）が運用したとニュースにも取り上げられていない機械兵器にその場に居合わせた車掌ですらあっけに取られていると、頭と動体が一体化した機体の顔の部分にあたるスートブラックのモノアイがついっと動く。
『乗客は無事ですか』
「え!?.あぁ、はい…」
機械から発せられたのはスピーカーを通してくぐもった若い少年の声。腰に下げたレイピアといい、重厚な装甲といい、物々しい見た目にそぐわないそれに車掌が驚きながら返事をする。
『わかりました。もうしばらくで賢者の島の魔法機動隊（マジカルフォース）が到着します。それまでどうかこの場を動かないように』

「は、はい！」
そして1つ目は次に3人をとらえた。
『そこの3人、助けが来るからって気を抜かないように！もっとしゃきっとおしよ！』
そんな檄を飛ばすと足のホイールを逆走させ、ぐるりと回って元の道を戻っていく。
「…は？」
「なんかえらそーなヤツだったんだゾ」
エースとグリムが首をかしげる中、
「……」
デュースだけは人型の肩に描かれた紋章に気づいていた。
あれは――。

この路線を含めた一帯の地下鉄では、全ての電車の運行を見合わせるという大事件が現在進行形で起きている。損害賠償はどこへ求めればよいのか。
クロウリーが仮説本部の設営された駅のホームへ降り立てば、モニターから顔を上げた機動隊隊長がはっと姿に気づいた。
「お待ちしておりました、ディア・クロウリー殿」

「お邪魔しますよ。早速ですが、状況は?どうやら下手人の姿が見えないようですねぇ」
「ええ。流石、大魔法士ともなれば残留魔力でわかりますか。17時35分発の列車の2両目までを喰らった姿が確認されているのですが……」
事件発生当初のカメラ映像を確認すれば、見覚えのある三人組が衝撃に見舞われ、巨大すぎて黒い影としか判断できない何かに食われるギリギリだったことが分かる。
「ふむ…。確かこの路線は、南西の廃線区画までつながっていましたよね?そこに逃げ込んだ可能性は?」
「十分にあり得ます。しかし、他にも今は使われていない線路がありますので」
現在の映像に切り替えれば、要救助者を発見し救助に当たっている隊員の姿があった。一先ずは安心といったところ。
しかし、廃線と決め打った結果手薄になったここを襲われては元も子もない。
「そうですかそうですか」
この場におけるクロウリーは、作戦に参加している学園の生徒たちの統率――司令だ。
最終的な決定は賢者の島の魔法機動隊(マジカルフォース)隊長が下す。
「さて、どうしたものか…」
そんな彼が逡巡していると、電車がホームへ入って来る際に巻き起こる突風にも似た

風を纏って、山吹色の機体がトンネルの闇を突き破り現れる。
ぎょっとした周囲と比べて落ち着き払ったクロウリーが近づくのを無視して、飛行形態から蒸気を噴き上げつつ人型へ変形して着地。まだ白く煙ったままなのに、ほとんど間を開けずにガコン!とモノアイのある前面が跳ね上がった。
「一帯は探しつくしたが、化け物の姿は見当たらなかった。…チッ、かくれんぼは性に合わねぇ」
「お疲れ様です、キングスカラー君」
狭いコックピット内からホームへ悪態をつきながら軽く飛び込んだレオナへ自分的にはねぎらいの声をかけたつもりのクロウリーが鬱陶しいと言わんばかりに睨まれる。しかし気にせず話をつづけた。
「ところで、他の寮長たちは?」
「リドルの事ならそこのヤツが知ってんだろ。他は知らねえ」
レオナが設置されたベンチにどっかと腰かけ、手の空いた隊員に水を要求する。
運動時と同じく一本に結んだ髪だが、服装はいつもと違う。それを含めて窮屈で仕方がなく、ひと眠りとはいかなくとも膠着状態の現状に休憩を挟みたいらしい。
「…これは監督生くんの帰りを待つしかないようですねぇ…」
「アイツを待つより、廃線区画まで直接行った方が早いだろ。どうせそこだ」

ペリドットの瞳が一瞥する。見てきたのだとすれば、残りの寮長の行動はだいたい予想がつく。
「背後の安全確認は重要でしょう?」
「めんどくせえな」
渡されたミネラルウォーターのボトルを遠慮なく開けて一口煽った。
これ以上レオナから情報を引き出せそうにない。
クロウリーは監視カメラの映像を映すモニターの横に設置された各機の位置を示すレーダーを見て、「ふむ」と考えを巡らせた後、コツンと杖で硬質な床を叩いた。
通信機のスイッチが入り、
「全員へ通達です。今すぐ戻って来てください」
機動隊員が止める間もなく言う。

線路内にカラフルな機体が計7機並び立つ。そのうちの青い機体だけハッチが閉じたままで、中のパイロットも出てこないのはもはや通常運転だ。
モニターのある場所より少し離れた場所、レオナが座ったままのベンチの周りに集合したナイトレイブンカレッジの生徒たちがそれぞれの報告を終え、学園長の指示を仰ぐ

……というより、最初からこのカラスに頭としての力を信じていないので、どうするのかを自主的に話し合っている。

「まさか、エースたちが巻き込まれていたなんて……」

自分の寮生が間一髪のところで助かっていた事実を知って青い顔のリドルが、あんな檄よりもっとかけるべき言葉があったんじゃないかと片手で肘を抱え、指を口元に宛がって呟いた。

「でも無事でよかったな、リドル！監督生！」

「ほんとですよ。人生何が起こるかわかったもんじゃないですね」

無機質で圧迫感の強いホームにカリムのからからと開放感のある励ましが響き、監督生が深くうなずいた。

「…で、問題は如何に相手を見つけるのかよね。線路図を見たらわかるけど、かなり入り組んでる」

『ヴィル氏の言う通り、ハツラの薔薇の迷路もびっくりの入り組みよう。地下鉄工事は無計画に進められたんでしょうなぁ、いざ運行を始めたら使わない線路が山と出たのが見てわかる』

通常の図面では隠されていてわからないが、イデアがどこからか見つけてきた地図では詳細にトンネルのありかが示されている。プリントアウトされたそれへ、「今アタシ

たちがいるのはここ」とヴィルがペンで印をつけた。
「なんて無駄が多いんだ…！工事費だって際限がないわけじゃないでしょう!?」
　遠回りのルートや明後日の方向に延びていくルート。明らかな無駄にアズールが我慢ならず声を上げる。
「そうだな…。どうしてこんなに掘りまくったんだ？」
「賢者の島は辺鄙なところだが、星のツボという地脈の結束点…つまり、魔力の力場の直上にある。魔法石の鉱脈か、はたまた魔法暦に残る大発見か…どちらかを引き当てれば儲けものだったんだろう。当時の権力者にとってはな」
『利権乙』
　カリムの疑問にレオナが簡単に答え、ぽつりとイデアは言い捨てた。
「それで、この無駄なトンネルのどこかに潜んでいる可能性が…っていう話ですよね。まぁ、どう見ても南西にわちゃわちゃ固まってる使われてない区画が怪しいですけど」
　監督生が指で現在運行している線路より離れた箇所にある一角を丸くなぞる。
「嫌な感じがして、アタシがイデアとレオナをつれて見に行った方面よね」
『あーね、ドス黒い魔力の波長で一瞬計器が狂った場所ですな。まぁ、ゲームのセオリー的にはそこ』
「だが、そこ一点に攻め込んで背後がお留守になるのは危ねぇ…。だよな、クロウリー」

レオナに急に話題を振られて「あぇ!?そ、そうですね！危険です！」と微塵も聞いていなかった学園長が返事をした。

そんな様子に監督生が肩をすくめ、アズールは眼鏡の位置を直す。

「だったら、何人かここの守りを固めて、残りの全員で奥に行くのはどうだ？」

「いい考えだね、カリム。救助者の手当てなどの手伝いもできるだろうし」

「ありがとな！」

『…それだと、もしここで戦闘になったら逆に危ない希ガス。機体の大きさ的に動くのもやっとだし、相手は電車を食いちぎれるほど強大で巨大ですぞ？』

「あ、そっか…」

イデアの指摘通り、もし非戦闘員がいる状態で戦いになれば被害は確実。それほどまでに地下鉄の狭いホームは戦いに向かない。

カリムの案に同意したばかりのリドルは眉を吊り上げ、〝じゃあ何か代替案があるんですか？〟と問い詰めようとすると、監督生が「あの、提案があります」と口を開いた。

「まず、救助者の安全の確保。それからここにつながるようなトンネルを魔法障壁とかで封鎖して、廃線までの一本道を作る。そうすれば相手だって簡単にここまで来られないと思うんですよ」

リドルがくっと言葉を飲み込む。監督生の提案は、障壁を作るのを機動隊にまかせて

出来るだけ大勢で本命を叩くという作戦だ。
　しかも、機動隊が展開する魔法障壁はただのお守りじゃない。対魔獣捕縛用魔法障壁を設営するための魔道具は魔法機動隊（マジカルフォース）の常備品だったことを、監督生は知っていた。
「機動隊が障壁を作る前に先行班が露払いをします。敵が奥にいるとはいえ、尋常じゃない魔力に惹かれて湧いた連中もいましたし」
　リドルだけがあの電車に到達した理由は、勿論この付近の確認に人員を割いていたためだが、少なからず魔力に呼応した魔獣が出現し戦闘になったからでもある。
　説明しながら監督生が、「ここと、ここ、あとここ…」といった具合に廃線までの最短ルートと重なって、障壁を作るべきトンネルの入り口へ8か所にのぼる印をつけていく。
「機動隊による魔法障壁がある程度進んだら…いよいよ本隊が突撃という寸法です。先に本隊が行くと、私たちの魔力に影響を受けた魔獣が狂暴化してしまうかもしれないので」
「ここの安全は重要だけど、アタシたちに降りかかる戦闘による消耗のリスクも避けるべき…。カリムの案を活かしたいい作戦じゃない」
「おお、すげーな監督生！これなら戻ってくるときに迷わないし、オレもいいと思う！」
「迷う前提なんですね、カリムさん…」

作戦の説明を終えた監督生はちらりと顔を上げ、天才司令塔と名高いレオナの顔色をうかがう。女性の――特にこういった時における監督生のしたたかさやバネを買っている相手は「好きにやってみろ」と言った。

閉じこもったままのイデアも異論はないらしい。

「じゃあこれで行きましょう」

そして、所在なさそうにしていたクロウリーに機動隊への協力を頼むように言うと、作戦開始の合図となる救助者の到着を待った。

「ッ、らぁ!!」

レオナのクローが四足歩行の？せこけた獣を捕らえてコンクリートへたたきつけ、短い悲鳴を上げたそれに銀のナイフが3本追い打ちをかける。

「急に活発になった…。あの子が予想した通り、こっちの動きが読まれているのかしら」

「そう？魔力に反応しているのが現実的かと思われ」

ついさっき4か所の封鎖を終えて本隊へ突撃の合図を送ったばかりなのに、あまりにも相手の動きが速い。

ナイフを補充しながらヴィルが言うのに、イデアは周囲の敵性反応をレーダーで確認

しながら答える。この近くに反応はないが、ほの暗い奥から風鳴りか咆哮かどちらのものかわからない呻きが聞こえてきた。
「どっちでもいいだろそんなの。あと半分やりゃあこっちの仕事は終わりだ、とっととやろうぜ」
獲物が完全に動かなくなったのを確認したレオナが爪にこびりついた血を払う。
「……そうね」
魔獣の血が黒く見えるのは光の加減か、ここ自体色に乏しいため感覚が狂っているのか。あまり美しいとは言えない戦闘の後の惨状に、眩暈にも似た疲れを感じたヴィルはふっとモニターから目を離して息を吐いた。
背後のことは心配せず奥へと進む。
魔法障壁を作る機動隊を先導する班に振り分けられたのは、レオナ、ヴィル、イデアの3人。血気盛んな2年と違って3年は、〝汗水垂らさず自分の思うように現場を作り出すこと〟が重要なもので、この前座扱いには誰も反論しなかった。
「……ここか」
レオナが立ち止まり、地面を照らしていたライトを横へ伸びるトンネルへ向ける。それが闇に紛れた黒い何かが蠢くのを露わにさせ、身構えた。
――来る。

「ヴィル氏！」
「何？……ッ！！」
　気付いたイデアが声を上げ、振り返ったヴィルに飛び掛かった影。サルのようなそいつが持つ長い腕に組みかかられて、悲鳴も思わず飲み込んでしまうほど必死に振り払おうと前後左右に動き回ってもがく。
「チッ、まだいやがる！」
「あっ、ど、どうしよ」
　この一体だけじゃない。ヴィルをとらえて味を占めたのか、同じような獣がレオナに飛び掛かろうとして薙ぎ払われた。
　自分のせいで注意が逸れたと焦るイデアが魔導ビットでヴィルに張り付く獣を狙うが、不規則に動き回るので定まらない。正直、今の自分のエイムに自信がなかった。下手をすればヴィルに当たってしまう。
「くっ」
　この状況で2人からの手助けがないことは分かり切っていたヴィルの額に汗が滲む。モニターは全てこの醜い獣で埋め尽くされ、機体の上腕にある左右に設置された操作グリップもギリギリと折れそうなぐらいに握りしめて抵抗しているが状況は好転しない。
　ホイールがギャリギャリ悲鳴をあげても一向に振り払えず――やがて縺れて仰向け

に倒れ込んだ。
「おいカイワレ！まずは自分の心配をしろ!!」
「ヒッ、は、ハイ！」
地面の砂利と鉄塊が衝突し擦れる嫌な音にイデアがいよいよ撃とうとするも怒鳴られて暗闇へ向き合う。自分を狙っていた獣がレオナのフレイムブラストで燃え尽きていった。
その間にヴィルが自分にのしかかっていた獣とどうにか位置を入れ替えて、抑えつけるようにまたがる。両手のナイフを逆手持ちにし、魔力を込めると機体と同じ紫紺の輝きを放つ。
そして――力の限り振り下ろした。
「最悪！」
吹きかかった黒い血でなめらかな紫が汚れ、ザクリと肉を断つ感触が生々しく手に残る。全てへの悪態は獣の耳障りな断末魔と被って掻き消えた。
獣はぐったりと動かなくなって、血だまりがじわじわと地面に染みる。
すぐに2人の援護に回らなくては…そう考えても、肩で息をするほどの腹の底からぞわぞわせり上がる命の危機への恐怖に背筋が凍って何も言えない。
「おいヴィル、終わったんならこっちを手伝え！」

「…命令しないで、レオナ」
べったりと貼りつく前髪を軽く流してから、再びナイフを補充した。
イデアのビットが青い光線で2体撃ち抜き黒い飛沫を散らす。獣の血と表現していたその粘質の液体は――誰も口にしなかったが、おそらくはブロットだろう。
ずるずると湧いて出る獣の数も減って、一息ついたときに隣へヴィルが並んだ。普段であればその輝きに圧倒されてしまうが、今はこの鋼鉄の鎧越しなので普通に話すことができる。
「さ、さ、さっきは、ごめん」
「別にいい。さっさと片づけてシャワーを浴びたい気分なの」
また一体、ナイフによる見事なヘッドショットが決まった。
ヴィルの投げナイフは映画撮影の時に培ったスキルだそうだが、実戦における技の数々は購買のサムから教わったらしいとか。何があったのかはイデアでさえよく知らない。
「そ、そそ、そうですか、はい、す、すみません」
「なんで二回も謝るのよ…」
それに、話せると言っても普段そんなに顔をあわせない相手と意思疎通ができるわけなかった。

「お前ら下がってろ」
頃合いを見計らって、低く呟いたレオナの手元に魔力が集中する。
何をしようとしているのか察した2人が巻き込まれないよう後ろに行ったのを見て、獣どもが何も知らずこれ幸いと距離を詰めてくるのに詠唱する口元を吊り上げた。
「王者の咆哮（キングスロア）！」
魔法を纏った黄金の爪痕が獣を切り裂き砂塵に還す。何が起きたのかを理解させることなく、後に残るのは静寂と地下特有の冷たい風のみ。
「……終わったようね」
「はぁ、あと3か所…」
機動隊と入れ替わるように元の通路へ戻り、障壁を展開するのを見守る。
「3か所なら、それぞれ分担してやった方が手間が省けるな」
「レオナ氏はタフだからいいけど、拙者みたいなモヤシにはキツいですぞ」
ユニーク魔法を撃ち、その爪であまたの敵を引き裂いてなおこんなことが言えるのは、イデアの言う通り他人と比べて――勿論種族差も踏まえて――レオナがタフだからだ。
だが、イデアの保有する魔力量や戦闘におけるセンスは、搭乗する機体が〝高機動型試作機〟で扱いが難しいことは想像できることから、簡単に卑下していいものじゃな

い。
「はっ、口先だけはご立派なことで」
「…何？そんな安っぽい挑発効かないけど？」
だから鼻で笑い飛ばす。売り言葉に買い言葉。
イデアのスイッチに手が掛けられているのに、この場には唯一仲裁しようとするカリムや監督生はいない。
「アタシを危険に晒して、カリムの提案に文句を言って？…中々大層なことしてるじゃない」
と、ヴィルが畳みかければ、あんなことがあった手前「そ、それは……」と勢い弱って一歩下がった。
突然驚かされた程度でどうということはなく、ネタにできるだけの余裕はある。…世界的俳優ヴィル・シェーンハイトにそれぐらいのパワーはあってしかるべきだ。
「…う、わ、わかったよ！分担して敵を倒す！で、機動隊を誘導する！それでいいんだろ!?」
「最初からやる気出せ」
「全く…」
ふと見れば、ちょうど展開が終わったらしい。さらに奥へ進もうと足を向けると―

―。

「あ、高速で接近する反応４つ。……監督生氏たちだね」

　イデアが言い終わるや否や、黒、赤、白、臙脂の順で鉄の塊が空気を切り裂きながら飛び去っていった。

「もうここまで来たの？早いわね」

「乗客にはあの１年どもがいたからな。気合い入っててていいじゃねえか」

「あら、アンタがそんなことを言うなんて珍しい」

「…んだよ」

　自分たちの役目はほとんど終わったようなものかもしれないが、茶化すようなヴィルの言葉をぶっきらぼうに投げ捨てて地面を蹴った。この先にはまだ魔獣が潜む可能性があるし、言われたことをやらなかったらあの草食動物がうるさい。

　変形した機体のスラスターが黄色の噴射炎を吐き出して瞬く間に姿が見えなくなる。

「くぅ～～～!!やっぱ直立状態からの変形飛行は男のロマンですな～～ｗｗフヒヒヒｗｗｗ」

「何処まで行く気なんだか。遅れないで、イデア」

「あ、あ、ハイ」

　紫もそれに続き、青が戸惑いながら後を追う。

レオナたちと一瞬再会して以降途中で何体か魔獣と遭遇したが全て無視して、この廃線区画で最も広い場所――車庫へとたどり着いた。当然のことながら最近人の手が入った形跡なんてないし、少なくとも5年以上放置されているようだ。

もはや朽ちるに任せるといった具合に風化した廃線内が何故崩壊しないのか――それはつまり、ここに棲んでいるものがいるということ。

「でっか……」

てらりとした灰色の表皮は見るからにぶよぶよとしていて、黒い血管が浮いている。カリムが思わず声を漏らすほどの巨体が、埃塗れの魔石灯の薄明りにぼんやり映し出されていた。

「あの大きさなら、線路内を動くだけでもやっとだろうに…」

「そうですね。今までよく大人しくしてられたなぁ、っていうか最近になって生まれたモノという可能性が高そうだけど…」

「話すのは後にしませんか」

アズールがリドルと監督生に呼びかけたのをきっかけに、うぞ、と肉がうねる。嫌悪感を抱くような光景はモニター越しにはゲームの画面のように見えるが…全て現実の

もの。
　もしこんな化け物を放置すれば、次は何が起きるのか想像もつかない。なんにせよ、ここで討たねば学園どころか島が滅ぶ。
　のっぺりとした顔を向け、下部がメチメチと開く。見え始めた全貌はミミズか幼虫のようだが大量のかえしのような牙をびっしりと張り巡らせた口腔内はどれでもない。
　ない目でこちらを視認した刹那、甲高い女性の悲鳴のような鳴き声を上げた。
「っ、レオナ先輩がいなくてよかった！」
「獣人には苦しいだろうね」
　耳を塞ぎたくなるほどの不快な音に負けじと監督生が腰の小太刀を二本抜きざまホイールで駆け出し、それに続いてリドルが火球で水っぽい皮膚を焼き払った。
　ゼリー状の肉が溶けて露になった筋肉を切りつければブロットが飛び散って、素早く動けない巨体が力が働くままにごろりと転がる。
　ＮＲＣでは見た目が大人しく可愛らしいヤツから命知らずで好戦的なのか――そう言われればそうとしか言いようがないコンビネーションに、アズールは「やれやれ」と肩をすくめた。
「よし、支援するぜ！」
　カリムが掲げたパーツが薙刀へ変形し、４機を温かい光で包み込む。機体のパフォー

マンス向上とダメージを低減するバリアだ。
「ありがとうございます。では、抜かりなく」
アズールが寮服のコートを模した肩の盾状のパーツの裏に手を伸ばすと、金と銀の魔導リボルバーを取り出して構え遠慮なく引き金を引く。実弾ではなく魔導エネルギーの弾が分厚い皮膚を抉って貫き、逃れようと仰け反る相手に距離を詰める。
しかし、どうにも手ごたえがない。
最初に異変に気づいたのは、鋭くレイピアで切りつけていたリドルだった。
「全員下がって！様子がおかしい」
あまりにもこちらが一方的な優勢。ただえさえ鈍い動きが、攻撃によってほとんど動いていないように見えてきているのは――単に弱ってきているからじゃない。
リドルに言われて手を止め、ゆっくりと後ろに下がる。
線路やコンクリートに広がるブロットが風もないのに波紋を生み出し、せり上がった影が倒してきた獣の形へなっていく。
「…数が多い…！」
「待ってください」
インクの水たまりの数だけ次々と魔獣が生まれる。そんな異様な光景に監督生が刀を握り直したのをアズールが止めた。

「…どうやら僕たちに気づいていないようですよ」
そのどれもが自分たちに背を向け、動かないブロットの主の方を向いているのだ。
敵性反応を見なければ気配すらせず、まるでそこに存在しないかのよう。やがて大群が操られるようにゆらゆらと前進し始める。
化け物が一番近くに来た獣にあの筒状の口を開き、そして――。
「…た…べた」
カリムがらしくない細い声で言った。
頭から丸呑みにされ、ぐちゃぐちゃと粘液を擦り合わせるような不快な音と分厚い肉を通して籠った悲鳴が外へ漏れ出ているのが、あの中で何が起きているのかを想像させる。細かい牙で鉄だろうが肉だろうが細かくそぎ取られ、消化され、あの体の一部になってしまう……。
自分の身に起こるのも恐ろしいが、もし、犠牲者の中にあの馬鹿トリオがいたら……考えてしまった監督生の腕が震えている。「およしよ」とリドルが小さく窘めたが、その声にも怯えが滲んでいた。
……摂食行動のスピードが速いのか遅いのかわからない。立ちすくむ間に最後の一匹が飲み込まれ、ゴクリと消えていった。
「なんて…ことだ…」

悍ましい共食いに青ざめた顔のアズールが口元を抑える。
そのうちにでっぷりした体がボコボコと沸き立ち、鋭いものが皮を突き破って天井まで伸びていく。
次々と生える黒い蔦はそれだけで巨木の幹ほどはありそうかというのに、何本も絡み合って一つの塊になっていった。その中心が胴体とするなら上には頭らしいものが出来ているし、中間あたりから左右に枝分かれして地面を撫でるのは腕といったところか。
鋭い爪まで持ち、まるで冬虫夏草のように出来上がった怪樹（トレント）が頭を天井にこすりながら、じろりとこちらを見下ろして地響きのような雄叫びをあげた。
「サイエンス部に見せたら手を叩いて喜びそうですね？」
「この期に及んでとんでもないことを言うね、監督生。……来るよ！」
地面が突き上がって蔦が襲い掛かる。
第一波は二手に分かれて避け、第二波は切り落としたり燃やすことで対処。
「動きを封じる！」
カリムが手に仕込んだウェイトチェーンで怪樹の左腕を縛り上げた。
ギリギリとしなる腕、思いのほか持っていかれそうな相手の力強さ。ぐっと張った鎖を握り、機体の全重量とローラーの逆回転で踏ん張る。

「カリムさんが抑えているうちに！」
「はいっ！」
「言われなくても…！」
自分に向かってきた蔦を壁を蹴って避けた監督生が、そのまま走り抜けて距離を詰め小太刀へ持ち替え、力を溜め込む。狙いはカリムが抑え込む腕だ。リドルはそんな彼女の邪魔をする蔦を片っ端から切り払い、焼き焦がす。
「くらえ!!」
監督生が叫びと共に小太刀を振りかぶって交差した白い剣筋を飛ばす。腕の付け根へ直撃し、腕をもぎ取られた怪樹が唸り声をあげて、相反する力を失ったカリムが後ろに倒れた。
安心するのはまだ早い。
失った腕を形成しようと再び肩から蔦が何本か生え、今度はアズールめがけて迫る。
「っ」
避け、時に地面に突き刺さったそれを蹴ってスラスターを使って高く飛び上がった。叩き潰すべく振り上げられた残りの片腕をリドルの火炎魔法が防ぐ。
アズールが飛び込んだのは化け物の目の前。銃口を向け、パールグレーの魔法陣が横一列に展開し、エネルギーが収束していく。

「穿て!!」

一斉砲火。

爆発音と煙が巻き上がって、綺麗に決まった渾身の技に満足しているのもつかの間――アズールを背後から蔦が貫いた。

「アズール!、うわぁっ?!!」

カリムが助けようと杖に魔力を込める。しかし、アズールを貫いた蔦がそのまま強かに打ちのめして壁にめり込むほど吹き飛んだ。

「2人とも!!」

一気に2人も失って動揺しつつも外部の先輩たちへ連絡を取ろうとしたが、ノイズが酷く繋がらない。

リドルが〝魔力異常〟の文言をウィンドウから見つけた時にはもう遅く、重くのしかかる周囲の魔力が機体を蝕んで上手く動かせなくなっていた。

「オレは…大丈夫……だ、だけど…アズールが……!」

「動けるかい、カリム!」

「ダメだー…」

機体のあちこちから蒸気が吹きあがり、どのスイッチを押しても動かない。不明瞭な視界でも、いつもないものがモニターを汚しているのがわかる。……血だ。

幸いこの魔力異常で最低限の通話機能だけしか作動しないらしい。二人には黙っておこう。
「アズール先輩、アズール先輩！起きてください!!」
監督生がなんとかアズールを助けて端に寄せて呼びかける。しかしぐったりしたまま返事はない。
最悪の事態しか浮かばない……。「まさか、」と言いかけて残りは口にしなかった。
「監督生…、やるしかないよ」
「…はい、リドル先輩」
まだ戦いは続いている。

『魔…ガガッ…が上昇……ザーッ…発生!?戻っ……い……ぞ!!?』
『学…長……ザリ…今…子たち……繋がっ……!!?』
「あの、通信障害が発生していましてですね！」
『……の五の言っ……か！』
『ちょ……レオ…氏やめ……』
ブツン。

ノイズ交じりの通信が3年生の間でも何かしらのトラブルが起きたことを予想させる途切れ方をし、クロウリーは無言でうんともすんとも言わない機器のスイッチを切った。

「ふーむ……。まぁ、大丈夫だとは思うのですがねえ」

「なにがだゾーー!!!」

類を見ない大ピンチだというのに、なぜか落ち着いた相手へグリムが爪を立てる。

「そうです！何なんですかあれは！」

「魔獣ですよ。普通より少しばかり厄介な」

「…で、なんでそんな普通より厄介な魔獣と寮長たちが戦ってるんっすか。しかもあんなロボまで使って」

デュースとエースも食って掛かった。

目の前で大事故に遭って精神的に参っている乗客もいる中こんなにも気丈でいられるのは、デュースがあの赤い機体の肩にハーツラビュルの寮章が描かれていたことを言ったからだ。

「大丈夫なはずないんだゾ！」

「そうは言ってもですね、グリムくん。こちらからじゃ手の出しようがないんですよ」

「…なんだよそれ、あの魔法機動隊（マジカルフォース）でも手も足も出ないってことっすか!?」

「奥に行ったって言う監督生たちは……そんなやつと……？」
役職持ちだけでなく、なにより監督生もあれに関わっているとなれば、なおさらマブとして引き下がるわけにはいかないのだろう。
「……わかりました、君たちにはお話しましょう」
そんな3人が今回の事故に巻き込まれてしまった以上全くの無関係じゃない。
熱意に負けたクロウリーがとつとつと語りだした。

弾かれたレイピアが地面に突き刺さる。
刃こぼれしていても柄に収まった魔法石はまだまだ赤い。なんとか手を伸ばして柄を握ろうとするが、
「あ”っ!!」
蔦に横薙ぎにされて吹き飛び転がる。
「リドル先輩！」
「ボクは…平気だ。なんとかして倒さないと……！」
革製のシートに背中を強打し、後頭部がずきずきと痛む。視界もぼやけて監督生が呼ぶ声ですら遠くに聞こえ、さっきの一撃で唇を切ったらしく血の味が乾いた口の中を占

めて不愉快だ。何かしらの機関に異常をきたしたらしいランプが明滅するがそれどころじゃない。

「ンのやろっ!!」

まだ動ける監督生が駆け、打ちのめそうとする蔦に刀を突き立て断ち切る。その間にも別の方向から伸びた蔦が装甲を狙うがぐるりと回転して避けた。

決定的な一打を加えられなくとも、リドルが立て直す時間を稼ぐ。持久戦なんて圧倒的にこちらが不利だと最初からわかっている。

「カリム!外との連絡は!」

「…ダメだ」

応急処置に使うには高すぎる白い布地のターバンが赤く染まったカリムが短く結果を伝えた。

レイピアを拾い上げ、「そうかい」とリドルは諦めのつかなそうな声色で返す。

「きゃッ」

とうとう蔦が監督生の足を捕まえ、宙に投げ飛ばして地面にたたきつける。一瞬コックピット内のモニターや照明が消えるほどの衝撃は鉄の塊らしくなく一度地面で跳ねたことからも想像できた。

なんとか立ち上がろうと軋む体を動かして前を向く。だが、そこにあったのは蔦では

なく怪樹の爪。

…もうだめだ。

いつの間に目の前まで迫ってきていたのか、振り下ろされるそれに目を瞑る。しかし、メキメキと金属にめり込む音がするのに自分には痛みもなかった。

そのかわり、赤い機体が立ちふさがって――。

「せ、先輩…？」

「この魔力異常のせいで…こっちはろくに動けやしないんだ…！」

爪が貫通した左腕がゴキン！と異音を立てて小さな爆発を起こし黒い煙と火花を散らす。「ぐっ」と機体の揺れに小さく呻くが、ここまで深々と突き刺してくれたのは都合がいい。

「はあぁぁっ!!」

右手で握りしめたレイピアを思い切り怪物の腕に突き立てた。怪物がたまらずリドルを解こうと振り回すも食らいついて離れない。

さっき打った背中の痛みや眩暈はまだ後を引いて、いよいよ意識が遠ざかりかける。…まだ課題が終わっていないんだ。このボクが課題の未提出なんてルール違反を犯すわけないだろう。

そんなわけで諦めるわけにはいかない。それに、機体の心臓である魔導機関が止まり

かけていることは分かっていたから、せめて。

「できることなんて、このくらいだろう…!!」

今出せる魔力全てを注ぎ込み、薔薇色の奔流が蔦が絡み合ってできた腕をさかのぼっていく。

起爆剤としては十分。全出力を振り切って機体の予備エネルギーが作動し、モニターだけが煌々と明るいコックピット内でリドルは薄く笑って――唱え慣れた炎魔法を囁いた。

「リドル先輩!!、ッ」

耳を劈く爆発音。目の前に落雷が起きたような衝撃に思わず目を閉じる。

次に監督生が目を開けた時広がっていた光景は、あたり一面火炎地獄と化した挙句スプリンクラーが作動し土砂降りの水をばらまいている他、返事を寄越さないアズールと――爆風で転がされたままのリドル。

「嘘だろ…なぁ…!」

カリムが必死に呼びかけても動かずそのままだ。

絶望的なのは、リドルが命を懸けて自爆を仕掛けたというのに相手がまだ生きているという事。

半身が吹き飛び心核の魔法石こそ剥き出しになったが、カリムにちぎられた腕の代わ

りの蔦がまだ残っている。
「ったく…、もう…！」
立ち上がって大太刀を握り、下段に構えた。
自分でもなぜ諦めないのか、どうして周りが諦めてくれないのか疑問まで浮かんできて笑える。
せめて膝をつくことができないのなら。
せめてこの場に、あと一人いてくれたら。
「どこほっつき歩いてんのさ、ツノ太郎…！」

――スラスターの音が、爆発音で遠くなった耳にも聞こえてくる。

カリムがふっと入口を向いたとき――分厚い魔力の壁を切り裂いて、この閉鎖空間に飛び込んできたのは鮮烈なライムグリーンの機体。

宙で人型に変形し、レール上をモノアイが左右に駆け抜けて現状を一瞬で把握した後に緑の落雷が怪樹を打ち据えた。澱んだ魔力と数多の命が凝縮された核にヒビが入り、その上に乗った頭が悲鳴を上げる。

攻撃魔法の強烈さに対し優雅に地面に降り立つその気品。

魔力異常に揺るがない莫大な魔力。

「……僕を呼んだな?」

マレウスのモニターが映すのはただ一人、自分を呼んだ友の姿。

「…ふむ、怪我をしているのか。アーシェングロット、ローズハートもあの姿ではもう動けまい」

何も言えず立ちすくむばかりの監督生を見て、魔導式とはいえ中身のわからないカラクリを修復することはできないマレウスがぽつぽつと言う。

「2人をアジームのそばへ。……帰るときにまとめて送ってやろう」

「ま、まって、ツノ太郎!ほんとに来てくれたのは、ありがたいんだけど、私まだ…」

やっと言葉を紡ぎ出す監督生。しかし、モニターの通信ウィンドウに出ている冷涼な瞳に後が続かない。

「…その後は下がっているといい」

「……、わかった」

言われた通りにリドルとアズールをカリムの隣に運ぶ。アズールの場合は貫通している蔦を無理やり引き抜いたので白い機体に大きな風穴が痛々しい。

マレウスはいつも通り静かだが、語気でなんとなくこの戦いに今の今まで呼ばれなかったこと、友が傷ついたことに腹を立てているとわかる。

ぐらつく樹状の敵へ向き合いふわりと体が浮いて、掲げた手で生み出す風魔法に雷の魔力が伴い、少しずつその幅が広がっていく。

マレウスほどの魔法士ともなれば、搭乗者の魔力を増幅させ強力な魔法の行使を容易なものにする機体の能力と、内臓された魔法石だけで十分な武器になる。

今の彼ならば――それこそ、天災の一つや二つ引き起こせて当然だろう。

怪物も目の前にいる本物の怪物へ攻撃の手を緩めていないわけではない。ただ、蔦は全てマレウスを球体に覆う魔法障壁で弾かれ、ならばと包み込み圧し潰そうとしても雷撃に落とされているだけだ。

そよ風はやがて大嵐へと変わった。

内側で静電気が雷を引き起こし、外れかけていた天井の設備が巻き込まれて暴れまわる。

「……風よ、お前の力で万物を切り裂け」

そう告げて、軽くボールでも投げるような仕草で振り下ろされた腕。嵐が蔦を飲み込

み、断末魔ですらも全てを巻き込んで粉々に砕く。
心核はとっくに破壊されて無力化したのに微塵も残さないつもりなのだと監督生が気付いたとき、マレウスが腕を横に振り嵐を打ち消した。
そこにはもう散々苦戦させられた樹状の怪物はいない。唯一言えるのは、徹底的に無にされるほどの何かがいた痕跡が残っているとだけ。
圧倒的な力を見せつけたあとに――なんでもないように、マレウスが振り返る。
「ありがとな、マレウス。助かったぜ」
「礼には及ばない。当然のことをしたまでだからな」
カリムに礼を言われてそんなふうに返したが、少し嬉しそうに微笑む。
やっと終わったんだ。
監督生はその事実を悟ると、ふっと体から力が抜けていくのを感じた。

「この馬鹿！そんな大怪我をして…!!」
「へへ…」
包帯を巻いたカリムが血相を変えて狼狽えるジャミルに対してバツが悪そうに笑う。
「とにかく、マレウスが間に合ってよかったな」

「副寮長全員で学園中を探しての。オンボロ寮の庭先で佇んでいたのをルークが見つけてくれたんじゃ」
「竜の君（ロア・ドゥ・ドラゴン）のいそうな場所はだいたい把握しているからね」
　各寮の副寮長まで集まったホームの一角には賑やかな歓談の時間が訪れていた。ここから少し目を外すと機動隊が撤収作業と、救急隊員による乗客の保護という光景が広がる。
「いきなり連れてこられて、〝鎧を付けろ〟と言われた。あとはローズハートたちが知る通りだな」
「あの場に来るまで状況をわかっていなかったんですか…？」
　マレウスがいまだにピンときていない真顔なのはそういう理由があった。
〝鎧〟というのは機体のことを示し、〝魔導式の強化アーマー〟という設計コンセプトからきている。変形機構を備えているあたり、もはやそういうロボット兵器と言っても過言ではないが。
　リドルが頬のばんそうこうを気にしがちにしながら驚き、「そういえば」とトレイが話に割り込む。
「リドル、その怪我どうするんだ？エースもデュースもこのことを知ってしまったし、ケイトにも……」

「……そうだね、話さなくちゃいけない」

通常、生身であれだけのことをすれば魔力の急激な消費によるブロット中毒やオーバーブロットを引き起こしかねないのだが、安全装置と内蔵された魔法石の許容量が足りたおかげで擦り傷程度で済んだ。

自分たちが戦いに慣れていないのではなく、普通ならば無傷で任務を終えられるはずが今回の事件が特殊すぎた。責任感の強さから、自分を支えてくれる友人を仲間外れにはできないとして今度の茶会で話すことを、トレイに言われて決断する。

「……」

「あらレオナ、どうしたの？顔色が悪いけど」

「お前んところの狩人、相変わらずだな…」

「そうね」

もう用は終わったと言わんばかりに上着を脱ぎ、ベストのボタンを外す。結局マレウスが助けに来たのなら、自分があれほど焦らなくても良かったという取り越し苦労に嫌気がさしたからだ。「おい！」と今回の出動のギャラをクロウリーと交渉するラギーに呼びかけて、上着を投げ渡した。

制服をモチーフにした燕尾服風仕立てのパイロットスーツは、肩に二か所ある魔力運搬用のチューブを接続するアダプタが特徴的で、個人別で機体と紐づいたワンオフも

の。その証拠にそれぞれの制服の着こなしをある程度フィードバックしており、戦場においても美しさと学生であることを忘れたくないヴィルの肝いりのデザインだ。
　ちなみに、機体の設計者であるイデアが提案したＳＦチックなスーツは着脱の特殊性から却下されてしまった経緯を持つ。
「バイタルスキャン完了。心拍数・呼吸共に問題なし。生命活動に支障はありません。――アズール・アーシェングロットさん、お疲れ様。もう動いて大丈夫だよ！」
「ありがとうございます、オルトさん」
　機体ごと貫かれたと思われていたアズールは奇跡的にかすり傷で済んだ。とはいえ、脳震盪を起こして気を失っていたこと、割れたモニターの破片でいくつか裂傷を負ったことには違いない。壁際にもたれて座っていたが立ち上がり、軽く腕を回す。
「ああ、アズール…！とうとう死んでしまったのかと…うっかり葬儀の相談をフロイドとしてしまうところでしたよ」
「僕が生きていると確信しての行動だな？……まぁ、心配してくれていたのなら感謝しますよ」
　いつも通りなジェイドとアズールの横を通り抜け、オルトは相変わらず出てこない兄の傍へ寄る。
「お疲れ様、兄さん！あとでモニターの映像をもらってもいい？」

『……どうして？』
「兄さんがどんなふうに戦ったのか、どんなにかっこよかったのか、シミュレートしてみたいんだ！」
『ごめんオルト、今回は兄ちゃんあまり活躍できなかった』
「そうなの？……わかった。兄さんが見せたくないなら、それでもいいよ。でも次はきっと見せてね！」
『りょ』
　仲間たちが誰一人かけずに生きて戻ってこれた喜びが通り過ぎれば、どっと疲れに襲われて肩を落とす。そんな、みんなが楽しそうに話しているうちに立ち去ろうとする一人。
「おい子分、どこに行くつもりなんだゾ」
「げっ、グリム！」
「おいおい、オレたちほっぽって帰るつもりだったのかよ？」
「学園長から聞いたぞ、監督生」
　監督生の足に縋りつくグリム。右肩はエースが、左肩はデュースが捕まえた。振り返るとむすっと機嫌の悪いエースが「どうして言わなかったんだよ」と文句を言う。
「いや、その、言ったところで信じてくれなかっただろうし」

「……確かに、…信じないかもしれねーけどさ。何も言わないまんまで明日会えなくなるほうが最悪じゃね」
「ローズハート寮長の事もあったし、生きた心地がしなかったぞ」
「ご、ごめん…」
　寮長があの人型ロボットに乗って、魔法機動隊（マジカルフォース）や軍隊でも対処しきれない――最近になってニュースで騒ぎになっている事件で見かけるような――魔獣の退治や治安維持に当たっていること。それぞれの家から了承を得て活動していること。副寮長や片腕たちがその裏方を担っていること。彼らの安全上からこれは通常明かされない情報であること。そして、監督生が寮長たちをまとめる役目にあること。
　クロウリーが話したことが全てとは言えないうえに、監督生はこれからも寮長たちと危険な任務にあたるかもしれない。
　親友としては心配なところではあるが、それはそれとして。
「オレ様もあのでっけーロボットにのってみたいんだゾ」
「グリムは無理っしょ」
「無理じゃないか？」
「なんでだ!!!!」
　身近な人間が秘密部隊の隊長だなんてロマンがある。

グリムがイデアごとイグニハイド地下へ転送されていく機体を見送って目を輝かせ、二人に総ツッコミを喰らう。
「ボクもグリムには難しいと思うよ」
「イデアが言ってたんだが、寮長クラスの魔力がなければ、魔導機関に火を入れることもままならない代物らしいぞ」
そこにトレイを連れてリドルがやってきた。
「え？じゃあ魔力がない監督生がなんで動かしてるんっすか？」
「それは……」
エースの問いに対し、答えようとしたリドルの横で監督生が黙ったまま手のひらの上に赤い炎の玉を作りだしてみせる。ロウソクの火のようなとろりとした赤は何を燃やすわけでもなく、そのうち熱風と余韻を残して空気に掻き消えてしまった。
「……彼女には霊力という、魔力とは違う力が備わっているんだ。もちろん、まだ弱々しいけれどね」
「リドル先輩とか、寮長たちと比べるのが間違ってるんですよ。ああいうのを動かすことに長けてるってだけです」
「魔力がイマジネーションの具現化とするなら、霊力は物理的な働きかけ…と言ったところか。言っちゃなんだが、サイエンス部の端くれとしてはまだまだ興味深いよ」

闇の鏡の盲点、見逃した監督生の一面。もうすでに調べ尽くされ、彼女の機体の魔導機関には霊力との互換性を追加する機構が備わっているとトレイが付け足す。

３人が一斉に監督生の方を向いた。

「監督生!!!!」

「オマエどうして黙ってたんだゾ!!!!!」

「えっだって誰も聞かなかったから」

「そういうことは聞かれなくても自己申告しろっつーーの!!!!!!!」

「ギャアアーーー!!ごめんなさーーーい!!!!!」

「待てコラ!!!」

今度こそ怒鳴られて、バタバタ階段へ駆けていく。

リドルが「走ったら危ないよ!」と咎めるも、トレイは苦々しく笑うだけで、今日も元気な４人を何も言わずに見守っている。

賢者の島坑道戦　了